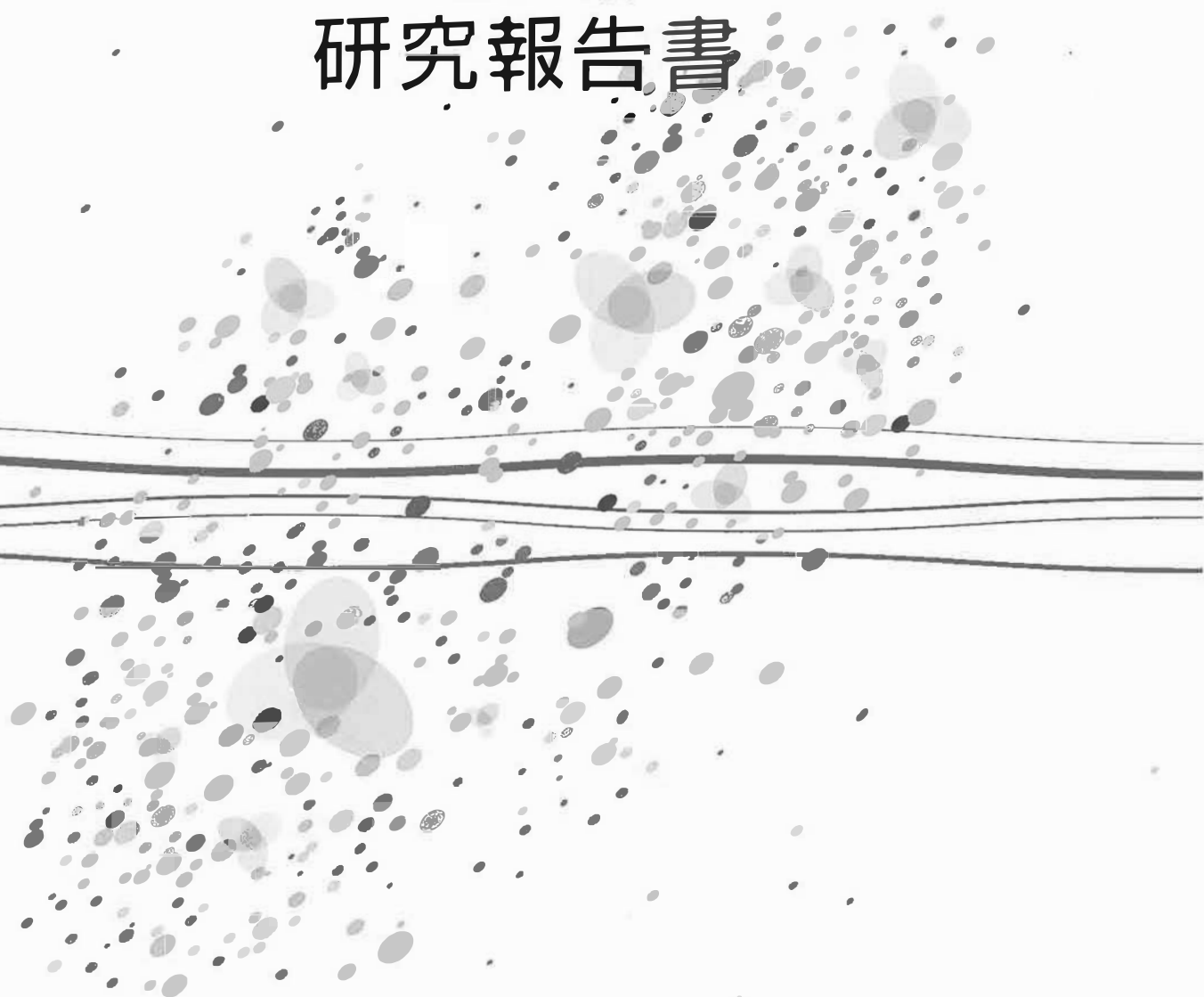


音楽系3大学による共同プロジェクト

音大連携による教育イノベーション 音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

平成21年度
研究報告書



神戸女学院大学



Shouwa
UNIVERSITY

昭和音楽大学



東京音楽大学

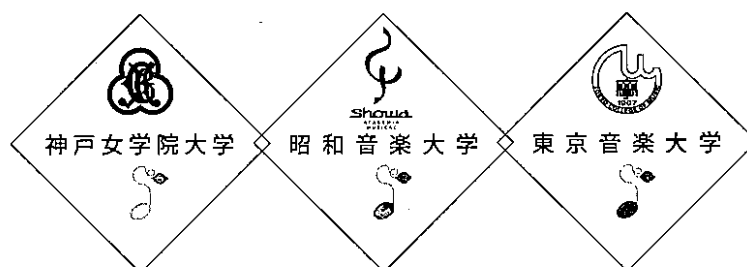
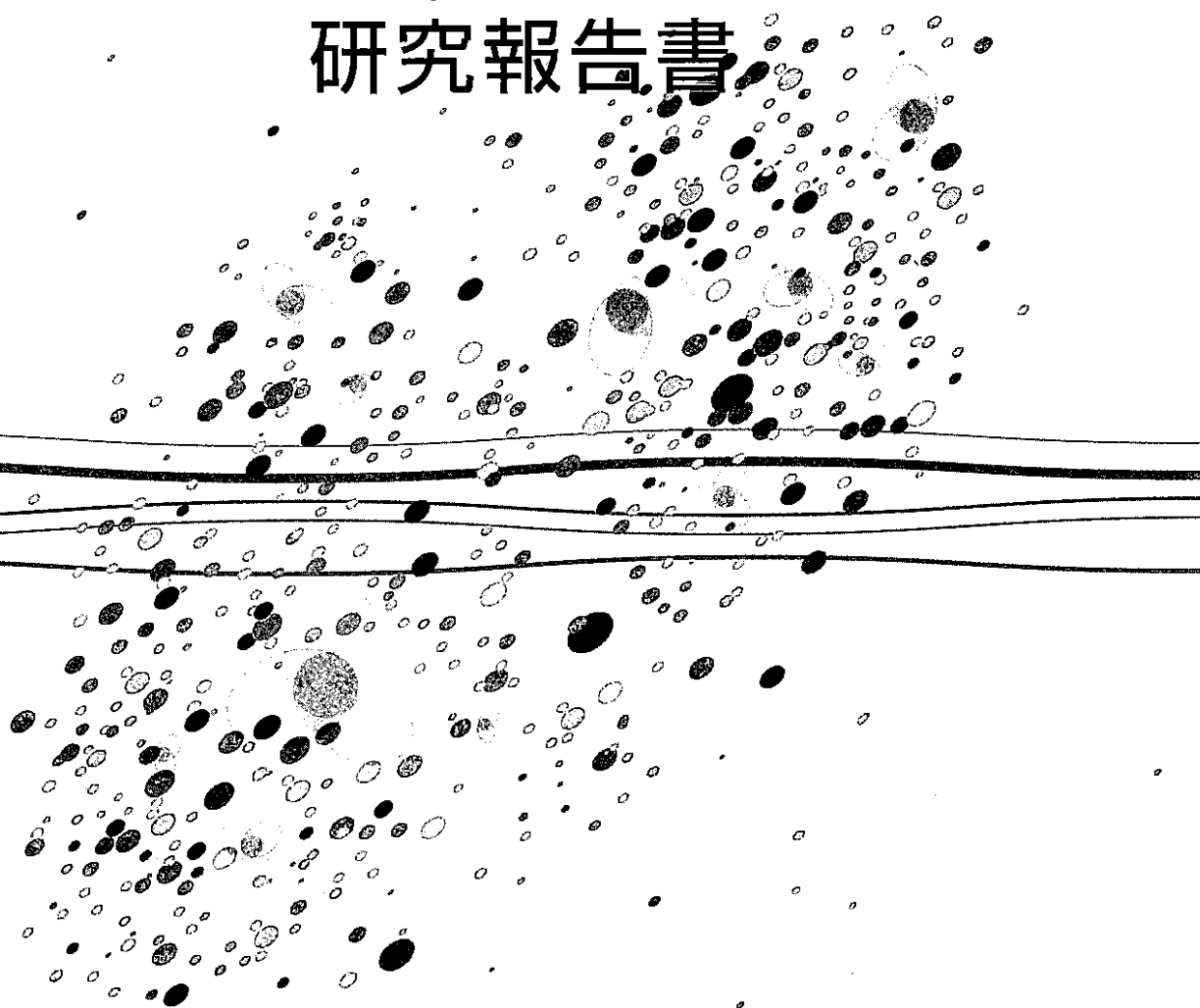


文部科学省 平成21年度 大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム選定

音楽系3大学による共同プロジェクト

音大連携による教育イノベーション 音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

平成21年度
研究報告書



<http://www.music-communication.com>

目 次

はじめに ——音楽系3大学連携事業と研究活動	3
1. 研修・調査報告	5
アメリカにおける先進的音楽教育・音楽活動について (平成22年1月、ニューヨーク)	
1-1 : Association of Performing Arts Presenters	7
(APAP : パフォーミング・アーツ・プレゼンターズ協会)	
1-2 : Network of Music Career Development Officers	11
(NETMCDO : 音楽キャリア開発担当者連絡会)	
1-3 : Consortium for Educational Outreach at Conservatories and Schools of Music	15
(CEOCSM : 音楽大学および音楽院における教育アウトリーチ担当者会議)	
プレゼンテーション時の英文配布資料	17
1-4 : Chamber Music America (CMA : アメリカ室内楽協会)	23
1-5 : The Academy (アカデミー)	26
2. 音楽大学・音楽院アンケート調査の紹介と分析	31
上記1-2 (NETMCDO) および1-3 (CEOCSM) の会議に先立って主催者が実施した アンケート調査についての考察	
2-1 : 米国の音楽大学および音楽院におけるアウトリーチプログラムに関する調査	33
2-2 : 音楽キャリア開発担当部署の活動実態についての調査	39
3. 「ミュージック・コミュニケーション講座」の効果測定に関する研究	43
平成22年度3大学共通科目新設に向けて：中間報告	
4. トライアル講座報告書	51
3大学共通科目新設に向けて：平成21年度に実施したトライアル講座（全3回）の報告	
4-1 : 仲道郁代のコンサートの作り方（平成21年11月11日）	53
4-2 : 地域とともに育つアーティスト～若手音楽家の活躍～（平成21年12月2日）	54
4-3 : 楽しい音楽会にするための3つのヒント（平成22年1月13日）	55
おわりに	56

はじめに —音楽系3大学連携事業と研究活動

3大学連携プロジェクトとは

東京音楽大学・神戸女学院大学音楽学部・昭和音楽大学が開始した連携プロジェクト「音大連携による教育イノベーション 音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて」が、文部科学省平成21年度大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラムに選定されました。この事業は、3つの音楽系大学が教育研究資源の相互補完や学生・教職員の交流、関連団体との協働を通して新しい音楽教育の基盤整備を行い、社会の様々な場で音楽活動を創造・実践できる「音楽コミュニケーション・リーダー」の養成をめざすものです。

プロジェクトの目的と計画

人と人とのつながりが希薄化し、特に若年層の「生きる力」と社会性の低下が指摘される現代社会においては、人の心を動かし結びつける音楽の力が益々求められています。しかしこの現状に対して、従来の音楽系大学の教育は、選ばれた人々が専門技術を磨く場としてレッスン室などの閉じた場にこもり、社会の動きとは運動しにくい傾向がありました。本事業で連携する3大学は、平成20年度までの各大学の取組と大学間交流を通して「社会に開かれた学び」の必要性和教育効果を改めて認識するとともに、音楽業界のプロフェッショナルや音楽教育に携わる数多くの関係者から、幅広い視野を持った音楽人の養成に対する強い期待があることを確認してきました。その必要性に応えるために、本事業では3大学が連携し、人と人とを結ぶコミュニケーションとしての音楽の根源的な力の回復に目を向けて、その力を地域社会で生かすことができる人材、すなわち専門力・社会性・コミュニケーション能力を備えた「音楽コミュニケーション・リーダー」の養成をめざします。

この目的を達成するために、3年間の事業期間内に、音楽系大学同士では初めての共通講座「ミュージック・コミュニケーション講座」の開設（インターネット・ビデオ会議システムにより3大学で同時中継）を実現し、教職員の意識改革、学生の交流、地方自治体・文化施設・関連団体・企業との協働を通して実社会に深く結びついた産学連携教育の道を拓くことを計画しています。

研究活動

この共通講座のベースとなるのが、3大学の教員による新しい音楽教育の方向性の共同研究です。国内外における先進的な音楽教育や実践的な音楽活動の事例について調査・研究し、関連学会や研修に積極的に参加することにより、日本の音楽系大学で有効な教材や方法論について総合的に研究し、その成果を新開設の共通講座で応用・試行していきます。

3年間の連携事業の1年目にあたる平成21年度は、ニューヨークおよび日本国内において各種研修・学会に参加し、アメリカや国内の他の音楽団体における新しい教育の方向性と実情を調査するとともに、ニューヨークでは早くも3大学連携事業の経過報告をする機会を得て、研究のネットワーク形成の端緒を得ることができました。また平成22年度から「ミュージック・コミュニケーション講座」を開始する前段階として「トライアル講座」を3回（それぞれ各大学から）実施・中継し、共通講座の進め方や学生の学習効果測定方法についての検討を重ねました。

本報告書は、平成21年度における研究活動の成果をまとめたものです。今後のプロジェクトの展開に向けて、各方面よりご助言・ご指導をいただければ幸いです。

平成22年3月

武石みどり（東京音楽大学）
津上 智実（神戸女学院大学）
武濤 京子（昭和音楽大学）

平成21年度の活動と研究会メンバー

平成21年度研究会スケジュール

第1回研究会：平成21年 9月14日(月)	於：東京音楽大学
第2回研究会：平成21年11月 2日(月)	同 上
第3回研究会：平成21年12月 7日(月)	同 上
第4回研究会：平成22年 2月 1日(月)	同 上
第5回研究会：平成22年 3月 1日(月)	同 上

研修・調査活動

音楽団体・音楽大学主催ネットワーク会議参加(ニューヨーク)：	平成22年 1月
平成21年度全国公立文化施設アートマネジメント研修会	
舞台芸術フェア・アートマネジメントセミナー2010参加：	平成22年 2月
(文化庁・社団法人全国公立文化施設協会主催)	
2009年度第15回FDフォーラム参加：	平成22年 3月
(財団法人大学コンソーシアム京都主催)	

トライアル講座の実施

第1回：平成21年11月11日(水)	於：神戸女学院大学
第2回：平成21年12月 2日(水)	於：昭和音楽大学
第3回：平成22年 1月13日(水)	於：東京音楽大学

研究会メンバー (平成22年3月現在)

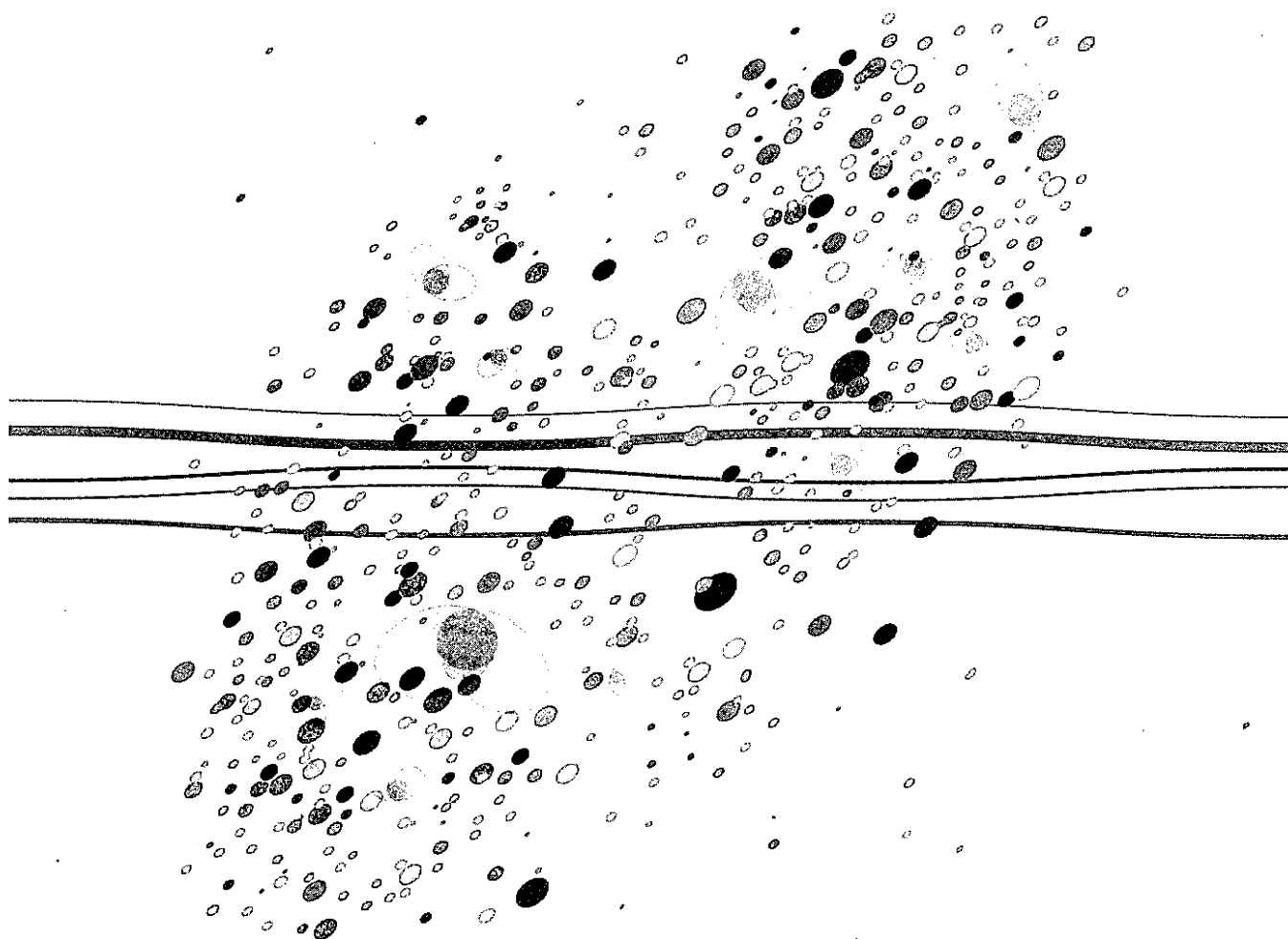
東京音楽大学：武石みどり、小島レイリ

神戸女学院大学：津上 智実

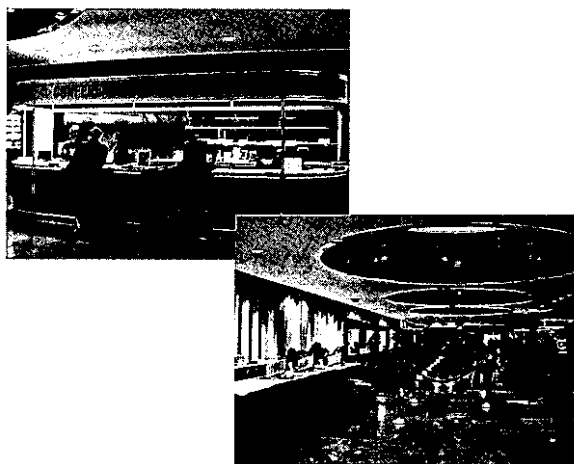
昭和音楽大学：武瀬 京子、赤木 舞、佐藤 良子

1. 研修・調査報告

アメリカにおける先進的音楽教育・音楽活動について
(平成22年1月、ニューヨーク)



2010年1月8日から12日まで、4日間にわたり開催されたパフォーミング・アーツ・プレゼンターズ協会 (Association of Performing Arts Presenters、通称APAP) 年次総会2010に、米国の業界状況把握、関係者との意見交換と情報収集のため参加した¹。本稿では、本総会の様子を報告する。



1. APAPと総会の概要

APAPは、全米及び世界15ヶ国の舞台芸術分野における約2,000のアートマネージャー、アーティスト、学術団体、主要都市のフェスティバル運営組織、施設運営団体・個人などで構成される501(c)(3)²を持つ非営利サービス組織である。毎年1月に催される年次総会は、全米及び世界各国から参加者が集う業界最大規模のもので、今年の総参加者は4,500名に上った。53回目となる2010年のメインテーマは「リスク、機会、そして現在」(Risk. Opportunity. Now.)。このテーマに基づく講演や専門能力向上のためのセミナー、分野・地域別セッション、個別クリニック・

相談会、展示会そしてショーケースが行われたほか、全米芸術基金 (NEA) ジャズ・マスター及びジャズ・アット・リンカーンセンター共催となるジャズ特別セッション、アンダー・ザ・レーダー・フェスティバル³が開催された。

会場はヒルトンNYをメイン会場とし、セミナーや個人ワークショップ、クリニック・相談会は隣接するシェラトンNY・ホテル・アンド・タワーズ、ショーケースはヒルトンNYに加えて、マンハッタン各所にあるコンサートホール、パフォーミングアーツ会場、ジャズクラブ、劇場などで催された。連日にわたり朝から深夜まで、様々なイベントが同時進行で行われたが、主なスケジュールは下記のとおりである。

1月8日

- 午前 各種セミナー
- 午後 開会講演
(ロッコ・ランデスマン: NEA新
チェアマン他)
- 各種セミナー
- 外国人・新規参加者オリエンテーション
- 開会レセプション
- 終日 クリニック・相談会
 (24時まで) ショーケース

1月9日

- 午前 各種グループセッション・
各種セミナー

¹ 参加したのは、小島レイリ (東京音楽大学連携コーディネーター) 1名。

² 501(c)(3)は、内国歳入法第501条C項3号の規定に基づき、連邦法人所得税免除や寄付税制上の優遇措置などの対象となる免税非営利公益法人である。米国の芸術関連機関のほとんどは、「教育、芸術、文学、慈善などを目的とする特に公益性の高い機関」として認可された501(c)(3)法人として活動を行っている。

³ アンダー・ザ・レーダー・フェスティバル (Under the Rader) は、NYにあるパブリックシアターが主催している新作演劇フェスティバルだが、6年前からAPAP関連事業として総会時期に開催されている。

午後 基調講演 (マジョーラ・カーター)
展示会
終日 クリニック・相談会
〃 (24時まで) ショーケース

1月10日

午前 各種グループセッション
各種セミナー
タウンホール・ミーティング
午後 クリニック・相談会
展示会
終日 ショーケース

1月11日

午前 各種グループセミナー
午後 授賞式昼食会
クリニック・相談会
展示会
終日 ショーケース

1月12日

午前 閉会講演(ウイントン・マルサリス)
午後 ジャズ特別セミナー

なお、本大会では講演やセミナー中のツイッター(Twitter)⁴でのツイート(Tweet)を推奨し、参加できなかった関係者や第三者への情報共有と情報発信の新たな手段として活用していた。

⁴ ツイッターは、個々のユーザーが140字以内で「何をしている？」(What's Happening?)を投稿・更新していくウェブサービスである。「ツイート」と呼ばれる個々の投稿にURLが付与されるため誰でも見ることができ、同サービス使用者であれば「フォロー(Follow)」という登録機能を使うことで、投稿へ返事することもできる。誰でも自由にフォローしたり、外れたりすることができることから、非常にゆるやかなつながりが自然発生するコミュニケーション・サービス、広い意味でのソーシャル・ネットワーク・サービスとして、2006年7月のスタート以降めざましい成長を遂げてきた。近年では単なるコミュニケーション・ツールというよりも、そのリアルタイム性の高さから情報収集・発信ツールとして注目を集めており、各国政府や企業、著名人らが広報・マーケティングに活用している。2009年6月時点での利用者数は、全世界で11億人、日本国内で320万人。

⁵ ロッコ・ランデスマンは、イェール大学助教を経て、投資会社を設立。その後1980年代よりプロデューサーとして多くのブロードウェイ・ミュージカルに関っており、「ビッグ・リバー」や「プロデューサーズ」などでトニー賞を受賞している。2009年8月、オバマ大統領によってNEA新チェアマンとして任命される。

2. 講演

全参加者が揃って出席する講演は、開会講演、基調講演、閉会講演の3回が行われた。開会講演はNEA新チェアマンであるロッコ・ランデスマン Rocco Landesman⁵、基調講演は環境活動家であるマジョーラ・カーター Majora Carter、そして閉会講演はジャズ・アット・リンカーンセンター Jazz at the Lincoln Centerの芸術監督であるウイントン・マルサリス Wynton Marsalisが演壇に立ち、リスクを冒し、現状に立ち向かい、前に進むことの重要性を語った。ランデスマンは、不況下でも進歩し続けてきた芸術の例を挙げ、芸術関係者がリスクを好機として捉え、攻めていくことのできる「楽天主義者」であることが必要と述べ、カーターはリスクの高い状況に立ち向かうことは、よりよい結果を生み出すことにつながると、関係者を鼓舞した。また、ランデスマンは新チェアマンとして、国内政策において芸術の担う役割を増やすことを目標とし、関係機関との連携を強化する方向であると、NEAの新方針を報告した。

3. 専門能力向上のためのセミナー

専門能力向上を目的に、3種類のトラックに分けられた25のセミナーが行われた。トラック1「核となるアーティストたち」(Artists at the Core)ではアーティスト自身と話す機会が、トラック2「参加者に力を与える経験」(Participants-Powered Experience)では様々な観衆・聴衆との関係性構築方法の模索が、トラック3「大胆なビジネスの流れ」(Bold Business Moves)では、適用可能な革新的なアプローチの学びが主軸に置かれていた。内容は「アーティスト、エージェント、プレゼンター間における成功提携方程式」「芸術と大学キャンパスの関係構築方法」「テクノロジーの最先端」「未来のためのリーダー養成」「ショービジネスの新モデル」など、比較的大きな枠組みに対するもの

が多いのが特徴である。このほかに、各機関の理事メンバーのためには、理事としての役割や責任、戦略の立て方等の特別プログラムが用意されていた。

筆者が出席した音楽のセミナーでは、スピーカーがそれぞれ音楽の未来について見地を述べ、今後どのような方法で芸術を提供すべきなのかという議論がなされた。その中でも、財政難でリスクを冒せないという芸術機関は多いが、アーティストの創造性を利用することで今まで以上に革新的なプログラムを打ち出すことが可能であるという意見が多く、事例の共有が行われた。また、テクノロジーを駆使して情報発信をすることが、アーティストの今後のキャリア形成において重要になるという発言から、Youtubeやホームページ活用方法、2009年大統領選時にオバマ陣営が使用したKickstartという資金調達サイトなどが紹介された。セミナーというよりも参加者の意見交換・情報共有の場として機能していたのが印象的だった。



(音楽セミナーの様子)

4. 分野・地域別セッション

分野別の15セッションは、「公演キャンセル時の対応方法」「エージェントやマネージャーの抱える問題」「型にとらわれない公演」「屋外フェスティバル」などセミナーに比べて具体的な関心のもとに構成されており、地域別の8セッションは、カナダ、南西部、ウィスコンシン、カリフォルニアなど、同じ

地域にいてもなかなか顔を合わせる機会のない関係者の情報交換の場となっていた。これらは午前8時から行われるものの、内容の特殊性により出席率は高かった。

5. 個別クリニック・相談会

小・中規模芸術団体や芸術機関、個人アーティスト、学生も多く参加することから、これらの参加者を対象者としたのが、各分野の専門家による個別クリニック・相談会である。著作権からビザにいたる法律関係、ファンドレイジング、マーケティング、教育プログラム開発など、個別もしくは多くても5名のグループ相談を行っていた。中でもアメリカ室内楽協会やNEAの助成相談は、申請方法を一から手ほどきするもので、個人からグループなど多くのアーティストに人気のあるものとなっていた。

6. ショーケース

APAP年次総会のハイライトでもあるショーケースは、本大会のために開催されるものから、通常の公演や特別公演を会議参加メンバーに開放しているものまで、約1,200公演がAPAP関連ショーケースとして指定されていた。連日24時過ぎまで行われる全ての公演に、会議参加者であれば無料で参加でき、それらの公演は音楽からダンス、演劇など、全てのジャンルを網羅していることから、業界の現状把握には最良の機会となっている。ショーケース会場での関係者間のネットワーキングも活発で、プレゼンターそしてエージェントがどのようなアーティスト、公演形態を望んでいるのかなど多くの情報交換が行われていた。

7. 展示会

約400組の出展者によるブースプレゼンテーションで、3フロアに分かれた会場を参加者が自由に見て回ることができるものであ

る。コンテンツを持っているブッキングエージェンシーやマネジメント会社、実演家団体が大半を占めているが、システム会社やデザイン会社など周辺関連会社も目立っていた。各ブースではアーティストのツアースケジュールなどが入手できるだけでなく、担当者との打ち合わせを行うことができることから、話を聞いたホール等の公演主催者達は、多いときには年間企画の40~50%をこの展示会で決めることもあると言っていた。



(左：展示会入口、右：展示会場内様子)

8. 音楽・アートマネジメント専攻学生の関わり

ここで、本総会における学生の関わりについて、少し述べておきたい。APAPは、年次総会の学生参加を奨励しており、希望する学生には参加費を無料にするシステムを持っている。会期中、12時間のボランティアをすることで、総会参加費及び学生会員年会費を無料にするというものだ。学部並びに大学院生を対象としたもので、専攻の縛りはない。しかしほとんどが音大生、美大生もしくはアートマネジメント専攻の学生となっている。この制度は、APAP側には人的資源を、学生側には財政支援を供給することでうまく機能している。また、単純に参加を奨励するだけでなく、「アートマネジメント・トレーニングをどう生かすか」という分野別セッションを行い、学生同士の情報共有や意見交換の活性化を促し、総会を将来のキャリアに

どう結びつけるかなどのアドバイスも積極的に行っている。

もちろんアートマネジメントを勉強する学生のみならず、演奏家を目指す音大生に対しては、個別クリニック・相談会として専門家によるキャリア相談を実施したり、展示会での売り込みを奨励するなど、現状に即した対応ができるようなアドバイスをを行い、できるだけ学生が関われるような環境作りをしていた。

9. おわりに

コンサートやパフォーマンスを提供する施設だけでなく、エージェンシーからマネジメント会社、アーティスト個人まで、全員が「プレゼンター」として一堂に会することで、通常では知りえない様々な立場の人が出会い、業界全体の状況把握をそれぞれのレベルで可能にしているのが、このAPAP年次総会といえるだろう。年に一度、抱えている問題や疑問を共有し、多くの議論を行うことで、解決策が生まれ、新たな提携や共同企画がスタートする。参加者が口を揃えて言っていたのが、「寝る間を惜しんででもたくさんの人に会い、意見交換・情報共有することがこの会議の第一目的」ということだ。人によっては会期中に60以上の打ち合わせが入ることもあるという。ネットやEメール、文献だけでは理解しきれない部分を、本総会に出席することで自分の知識とするのが重要なのだろう。

米国の現状はまだ明るいとはいえない。しかし、本総会のテーマへの解答として、「リスクを好機として捉え、いかに活用するか」というポイントを関係者が共有できたことは、今後の方向性の明確化につながったといえるだろう。実際、総会中に会った関係者の多くは、今後の展望は明るいと言っていた。

(小島レイリ)

1-2 Network of Music Career Development Officers

(NETMCDO : 音楽キャリア開発担当者連絡会)

音楽キャリア開発担当者連絡会 (NETMCDO : Network of Music Career Development Officers) は、ボストンのニューイングランド音楽院音楽キャリアサービスセンター・ディレクターのアンジェラ・マイルズ・ビーチング Angela Myles Beeching¹と、マンハッタン音楽院卒業生担当ディレクター、ジョン・ブランチャード John Blanchard の呼びかけによってスタートしたもので、音楽大学のキャリア開発部門担当者の問題解決の場として毎年開催されており、実社会と結びついた教育のあり方を検討するための情報収集の一環として参加した²。本稿では、2010年1月12日 (火) および13日 (水) にニューヨークで行われた第15回総会の様子を報告する³。



1. 会議テーマと全体スケジュール

本年度の会議テーマは Integrating Music Career Development Making It Sexy (relevant, compelling, necessary, appealing,

innovative) 「音楽キャリア開発をより魅力的で適切かつ革新的なものとするために」で、アメリカを中心に、オーストラリア、イギリス、カナダと日本の5カ国から35校4機関の合計49名が参加した⁴。

会場は、ワシントン・スクエア近くのプレイヤーズ・シアター (1907年に建設されたビルを1940年代に劇場に改装した歴史ある劇場) で、2日間の会議スケジュールは以下のとおりである。

1月12日 (火)

午前：オープニング

参加者同士を知るセッション

午後：問題解決のセッション (その1)

1月13日 (水)

午前：情報交換のセッション

パネルディスカッション

午後：問題解決のセッション (その2) と
まとめ

2. オープニング

午前9時、本年度のファシリテーターを勤めるジョン・シュタインメッツ John Steinmetz (ロサンゼルスオペラ首席ファゴット奏者) の挨拶でスタート。オーガナイザー



¹ 著書に "Beyond Talent" (邦訳：箕口一美訳「BEYOND TALENT 音楽家を成功に導く12章」東京：水曜社、2008年)がある。

² 参加メンバーは、小島レイリ (東京音楽大学連携コーディネーター)、津上智実 (神戸女学院大学教授)、武満京子 (昭和音楽大学准教授) の3名。

³ この会議に先立って、「音楽キャリア開発担当部署の活動実態についてのアンケート調査」が実施された。調査結果については39～42ページを参照。

⁴ 参加大学・機関については、14ページを参照。

のアンジェラ・マイルズ・ビーチングとジョン・ブランチャードはこの会議が今年で15年目を迎えたことに触れ、「我々を取り巻く環境は刻々と変化しているが、情報交換とネットワークで乗り切ろう」と呼びかけた。

開始に先立っては、軽い朝食（コーヒーと菓子パンやクロワッサンなど）が用意され、参加者同士が言葉を交わしながらスムーズに会議に入ることができるよう、またその隣には、持ち寄ったチラシやパンフレットがところ狭しと並べられたテーブルがあり、各自自由に持ち帰ることができるよう配慮されていた。

3. 参加者同士を知るセッション

Brainstorming the idea!

「新しいアイデアのブレインストーミング」

参加者全員が6つのグループに分かれて（知っている人が誰もいないグループに入るよう指示がある）、経済的なトピックのケースペーパー（グループごとに異なる）を受け取り⁵、20分程度でブレインストーミング形式で解決のためのアイデアを出し、それをグループごとに発表した。このトレーニングは、アイデアの善し悪しではなく、お互いが協力しあうことで新しい考えを生み出し、仲間意識を涵養することにあるようだ。また、事前に各グループに「各人から出されたアイデアを記録しておく」よう求め、発表の場でその場で模造紙にキーワードを書き、壁に貼り、皆で共有する。この場面ではファシリテーターの役割が大変重要と感じた。

"Finding That Teachable Moment"

「指導の現場から」

全員が4つの部屋に分かれ、参加者の中から事前に指名された者が、各自の「Teachable Moment」（学生に対峙するときに役立つヒン

ト）を他のメンバーに語る。筆者が参加したグループでは、カーチス音楽院のメアリー・キンダー・ロゼール Mary Kinder Loisel⁶が、「人生の輪」という分析ツールを使って、人生における8つの柱の中で「自分自身にとってもっとも大切なものは何か」を考えさせる、という事例を紹介した。これによって学生たちは初めて、自分の人生に「音楽」以外に何があるのか、「音楽以外の人生の柱」とのかかわり方について考えるようになり、その結果を共有しながら、個々の人生設計の相談に乗るそうだ。次のセッションでは、オーストラリアから参加したドーン・バネット Dawn Barnett⁷（オーストラリア・カーティン工科大学）が、いくつかの異なった袋やバッグを我々に見せ、袋の中にはいつているもの（CD、音楽祭のプログラムから、お面、ぬいぐるみなどまで）を確認して、自分の強みとそれらをどのように関連付けられるかについて考えるトレーニングを紹介した。

4. 問題解決のセッション

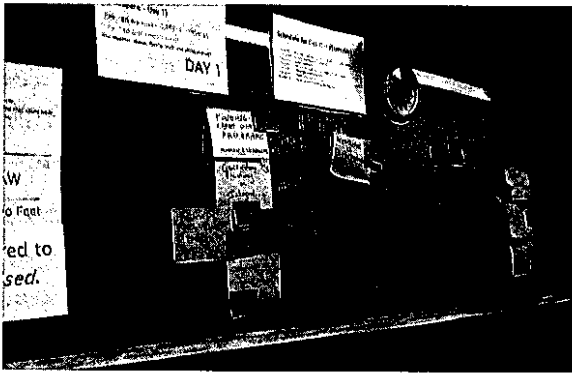
この時間は、この会議の伝統であり、大きな特徴のひとつとなっている。セッションの全体テーマのみを事前に設定しておき、参加者自身が自己の問題意識をもとに当日話し合う議案を設定していく形式で、最初の30分はその準備のために費やされた。セッションの全体テーマは「キャリアサービスセクションを大学関係者（学生、卒業生、教員、スタッフ、事務局）にとってセクシー（大切に魅力的なものにするためにはどうしたらいいか？）で、ファシリテーターの誘導のもと、参加者が次々に「私は〇〇について一緒に話し合う人を募集します」などと言いながら、枠のひとつに紙を貼っていくと、8つ（4部屋×2

⁵ 筆者のグループでは、「NY市の補助金を得てアウトリーチ活動を行っていた室内楽グループが、市の補助金カットの情報を得た。今後どのようにしていくべきか？」というケースが与えられた。

⁶ オーケストラやリコーンセンター等で広報担当の後2007年よりカーチス音楽院の教員兼キャリアディベロップメント・コミュニティエンゲージメント担当ディレクター。

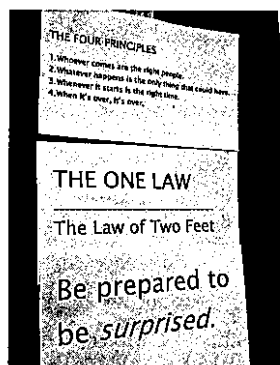
⁷ 著書に「Understanding the Classical Music Profession」がある。

回) あった枠はまたたく間にふさがった。



挙げられたテーマは「カリキュラムとの連動をどうするか」「教員をどのように巻き込むか」「HPやインターネットの活用方法」「予算・資金獲得の方法」などで、テーマを出した参加者は、そのミーティングの進行を行うと同時にまとめを書いて提出するように求められた。

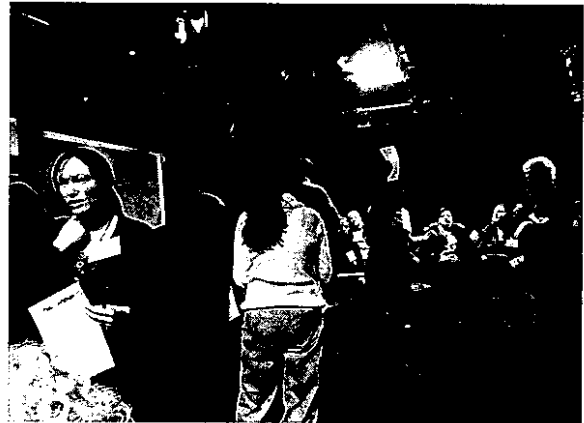
このセッションには、「いつでも何にでも驚きびっくりして、感じよう」というきまりと、4つの約束-①「来た人は皆その場にふさわしい人である(誰がいつきてもOK)」②「起きることはすべて受け入れる(何を話してもOK)」③「始まった時間が正しいはじまりの時間(いつはじめてもOK)」④「終わったら終わり(いつ終了してもOK)」-があり(写真参照)、参加者はそれに従って話し合うことを約束して各部屋に散り、12日、13日ともに夕方再集合してセッションのまとめを行った。



5. 情報交換のセッション：1月13日(水)

Idea Marketplaceという30分程度のセッションで、自分が普段困っている問題点を紙に書くと同時に参加者にアナウンスすると、

その問題に対してアドバイスを与えることが出来る人が、自分の名刺をその紙に貼り付けていく、というものである。声に出して共有することで互いの顔もわかり、リソースの共有ができる、という一石二鳥の30分である。名刺でいっぱいになったペーパーのコピーは、会議終了後に全員に配布され、当事者以外も情報共有できるようになっている。



6. パネルディスカッション

1月13日(水)午前中には2つのパネルディスカッションが行われた。いずれも、白熱した質疑応答の時間があり、参加者の意識の高さを感じた。

「卒業生という未開発の資源」

パネリストは、ジュリアード音楽院の卒業生担当ディレクター、クリーブランド音楽院学部長(厚生、キャリアサービス担当)、イェール大学副総長補佐の3名で、全員博士号、MBAなどの学位を持っている。卒業生を(在校生の)メンターやゲストスピーカー、インターンシップ受け入れ先、就職受け入れ先などにどのように活用しているか、卒業生担当部署とどのように協力しているか、学生へのサービスの質を低下させずに、同時に卒業生へのサービスを行うことは可能か、などについて話し合われた。

「音楽家兼起業家が語る」

自ら起業したりプロジェクトをスタートするなど、ユニークなキャリアを築いている音

大卒業生（木管五重奏リーダー、ライブハウス経営者、インターネット配給会社社長、映画やポピュラー音楽業界で活躍する作曲家の4名）を招いて、そのような世界にはいったいきさつ、よい点、困っている点、自分が卒業した音楽大学にあったほうが良い科目などについて、現実的な視点から活発な意見が交わされた。「ビジネスにかかわる科目があるべき」「申請書などの文章の書き方も教えてほしい」などの具体的な希望が述べられた。

7. まとめセッション

オープニング同様に、ファシリテーターを中心に参加者全員が輪になって座り、Talking Stick（それを持った人が話す）を次々に手渡しして、今回の会議の感想を述べ、来年の再会を約束して解散した。



8. おわりに

この会議の特徴として、まず第一に、情報公開・情報共有が徹底しているという点が挙げられる。すべての情報はまとめの場や文章で共有され、コピーやHPで公開されるシステムになっており、担当者同士が、学生確保のための競争相手ということを超えて、「音楽大学」として協力して前に進もうという姿勢が徹底している。

第二に、大変実践的、实际的な問題を取り扱っている、という点である。特に初日と二日目の午後のセッションは参加者が自分たちで議案を出すしくみになっているため、当事

者が現在直面し、悩んでいる問題に対して、直接に具体的な助けを得ることができる。

第三に、担当者自身の能力を磨くための仕組みが工夫されている点である。12日午前中のセッションのように、「初対面同士のチーム作り」「相手を尊重する」「常に寄り添う」など、学生や社会との間に立つ担当者にとって大切なコミュニケーションやコーチングのスキルを磨くためのワークショップ的な場が設けられている。

この会議参加者の何名かは、翌日に予定されている教育アウトリーチ担当者会議⁸にも続けて参加を予定しており、キャリア開発担当部署とアウトリーチや地域貢献担当部署とが密接な関係をもって活動していることの必要性和その効果を改めて感じた。

（武濤京子）

* 2010年1月総会参加機関（アルファベット順）

Astral Artists, Azusa Pacific University, Berklee College of Music, Boston Conservatory, Cleveland Institute of Music, The Colburn Conservatory, College of Charleston, Curtin University (Australia), Curtis Institute of Music, Duquesne University, Eastman School of Music/University of Rochester, Honens International Piano Competition, Juilliard, Kobe College (Japan), Loyola University New Orleans, Manhattan School of Music, Mannes College The New School for Music and The New School for Jazz and Contemporary Music, McGill University, Montreal (Canada), Millar College of the Bible, New England Conservatory, Octave Performing arts, Oklahoma Baptist University, Rice University/Shepherd School of Music, Royal College of Music (U.K.), St. Bonaventure University, San Diego State Univ. School of Music & Dance, San Francisco Conservatory of Music, Showa University of Music (Japan), Tokyo College of Music (Japan), The University of the Arts, University of Colorado at Boulder, University of Denver/Lamont School of Music, University of North Carolina School of the Arts, University of North Texas, University of South Carolina, USC Thornton School of Music, University of Wisconsin-Madison School of Music, University of Wisconsin Oshkosh

⁸ 次ページの報告を参照。

1-3 Consortium for Educational Outreach at Conservatories and Schools of Music (CEOCSM : 音楽大学および音楽院における教育アウトリーチ担当者会議)

「音楽大学および音楽院における教育アウトリーチ担当者会議 (Consortium for Educational Outreach at Conservatories and Schools of Music)」は、ニューヨークのジュリアード音楽院とマンハッタン音楽院、ボストンのニューイングランド音楽院の3校のアウトリーチ担当者からの呼び掛けで2007年に始められたもので、今年が4年目に当たる¹。アメリカ各地および国外からのアウトリーチ教育関係者が直接顔を合わせて意見交換する貴重な場として、年に一度開かれている。他校の取組について最新の情報を得るため、2010年1月14日(木)にマンハッタン音楽院で行なわれたこの会議に、3大学で揃って参加してきた²。その概要を報告する。

1. 全体の枠組み

ニューヨークのアップパー・ウェストに位置するマンハッタン音楽院(写真参照)。そのレジデンス棟のラウンジが今回の会場に充てられた。



マンハッタン音楽院の外観

参加者は日米の14機関からの23人。私が最初に参加した第1回(2007年)には12機関16人であったので、次第に拡大してきていると言える。

参加校(14校)

アメリカ: イェール大学音楽学部(2名)、イーストマン音楽学校、イリノイ大学、カーチス音楽院、サンディエゴ州立大学、ジュリアード音楽院(6名)、タフツ大学、ニューイングランド音楽院(2名)、ボストン音楽院、南カリフォルニア大学、マンハッタン音楽院(2名)

日本: 神戸女学院大学音楽学部、昭和音楽大学、東京音楽大学

午前10時から午後4時まで、次のような枠組みで進められた。

午前: オープニング

自己紹介(各大学の取組について)

小グループでのディスカッション

午後: 日本の最新の取組についての発表

トピック・ディスカッション

まとめ

2. 午前の部

10時開会。オーガナイザーであるターニャ・マッジ Tagna Maggi(ニューイングランド音楽院)とレベッカ・チャルナウ Rebecca Charnow(マンハッタン音楽院)から趣旨説明の後、出席者各人がどのようなアウトリーチ教育ないしは活動を行っているかを持ち時間一人3分で順に話していった。懐かしい顔もある一方で、ジュリアード音楽院の担当者が大幅に入れ替わっているのが印象的だった。次々に新しいスタッフを入れることで、理解者が学内に増えていくというメ

¹ 過去3回の会議の様子については神戸女学院大学音楽学部アウトリーチ・センター発行「アウトリーチ通信」第6、10、13号を参照。

² 参加したのは、小島レイリ(東京音楽大学連携コーディネーター)、津上智実(神戸女学院大学音楽学部教授)、武蔵京子(昭和音楽大学准教授)の3名である。

リットがあることだろう。

次に、5つの小グループに分かれて学生の教育システムについて議論した後、グループ毎のまとめを順に発表して問題を共有した。アウトリーチ活動の事前教育を組織的にやっている大学もあれば、ない大学もあり、取組の現状は千差万別であるが、ゲスト・スピーカーや卒業生の力をうまく生かすのが有効であること、またスケジュール調整や実技系教員の理解など共通の問題があることも浮かび上がってきた。

12時半、ケータリングされてきたサンドイッチ類をつまみながらさらに自由に情報交換が続けられた。

3. 午後の部

午後は、最初のセッション（13時15分～14時30分）が日本の活動報告に割かれた。今回日本から参加した3大学連携校が、各自の活動（神戸女学院大学の「音楽によるアウトリーチ」、昭和音楽大学の「アーツ・イン・コミュニティ」、東京音楽大学「アクト・プロジェクト」）と新しくスタートした3大学連携事業について報告した（報告者は津上、武濤、小島の3名）。関連資料（各大学の活動紹介パンフレット、3大学連携の第1回および第2回トライアル講座報告書とチラシなど）も英文のものを用意して配布し、理解の便を図った（17～22ページ掲載の「配付資料」参照）。



日本の取組みについて発表

参加者からは「一体どのようにして大学同士の協働が可能になったのか」「そもそもどうやって始まったのか」といった驚きの声で質問が寄せられた。サンディエゴ州立大学のマリアン・リーボヴィッツ Marian Liebowitz先生からは「自分の学生たちにはインターナショナルな活動をしてくることを求めているので、一度、学生を日本に行かせる必要があるように思う」という発言もあった。オーガナイザーのターニャから「正に望んでいた通りの報告をしてくれて大変感謝している」と謝辞があったことを付記する。

短いコーヒー・ブレイクを挟んで、最後は経済（不況）の影響と財政問題について全体で討議した。どこの組織でも人と財源のカットが厳しくなっている現状の中、地域に貢献できるアウトリーチは大学の売りとして補助金や寄附金を呼び込む強力な手段になっているが、そこで獲得された資金が必ずしもアウトリーチ部門の財源となっていないという矛盾に問題を感じるという発言もあった。

最後に、今回の総括と今後の活動についての意見交換をして16時に閉会となった。

4. おわりに

今回は、事前アンケートという形で各校の取組に関するリサーチが行われ、その結果を一覧表にまとめたものが、当日会場で配布された。これはアメリカのアウトリーチ活動の現状を知る貴重な資料と言える（33～38ページの抄訳参照）。

3大学で揃ってこの会議に参加し、アメリカ各地で同様の教育に携わっている人々と直接情報交換できたこと、中でも日本での新しい取組について報告できたことは、今回の大きな成果であり、今後さらに3大学連携による教育の進展について報告する機会を持っていくことが望まれる。

（津上智実）

【プレゼンテーション時の英文配布資料】

CEOCSM では、本取組ならびに3大学それぞれの活動に関するプレゼンテーションの機会が与えられた。その際に配布した資料は以下のとおり。

3大学連携事業

A 2009 Program for the Support of Strategic University Collaboration towards University Education Enhancement
Initiated by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology, Japan

Joint Project of Three Colleges of Music
Leadership Training through Music Communication
Kobe College / Showa University of Music / Tokyo College of Music
Report on the First Joint Trial Lecture

How to make a concert: Lecture by Ikuyo NAKAMICHI

18:30-20:00 at the Aikich Bldg., Kobe College Wednesday, Nov. 11, 2009

Famous Japanese pianist, Ms. Ikuyo NAKAMICHI was invited to Kobe, Japan, to give a joint lecture, entitled "How to Make a Concert by Ikuyo NAKAMICHI," on Wednesday, November 11, 2009. This was the first joint trial lecture presented online via the Internet video conference system. Students of the above-mentioned three colleges joined from each side.

The lecture started with NAKAMICHI's question to students on the aim of holding a concert, then proceeded with an explanation of her own philosophy and attitude toward the music, including episodes from her career. It also touched on possibilities for better performance of Beethoven's "Grande Sonate pathétique", and included a workshop: how to expand imagination.



The great pianist's clear explanation of music analysis

Comments from participants

- I was most impressed by her words: holding a concert does not only mean a performance on the stage. It includes all the preparation processes. (Piano major, sophomore)
- This lecture made me feel it is necessary to think that all that pianists should do is to play the piano. (Piano major, senior)
- Ms. NAKAMICHI focused on the importance of thinking, which made me realize that doing thinking can produce lots of new ideas to enrich our performance. (Piano major, 1st year, graduate school)
- Ms. NAKAMICHI said it was the "spirit" of pianists who moved the audience. For that purpose, pianists have to sink deeply into the music. I was most impressed by these words. (Piano major, sophomore)
- We have to be good at both speaking and performing in public. So, I think that input effort should be less or hands-on time bigger than the output effort. (Guitar, 1st year, graduate school)
- Seeing many different faces on the screen and hearing their comments, I felt as if we were in the same classroom. (Piano major, sophomore)
- This lecture was held at my college and I really enjoyed this lecture. We were able to exchange opinions with many students on a real-time basis. (Piano major, freshman)
- Ms. NAKAMICHI said she paid less attention to the lighting and the sound of the piano before her concert, which made me realize that I myself know nothing about lighting. Now I feel I should learn more myself. (Guitar, major, sophomore)
- I was convinced by Ms. NAKAMICHI's suggestion not to think too much about making before the concert, as we can easily find many topics while preparing. So, from now on, I myself would like to try to talk during the concert instead. (Piano major, 2nd year, graduate school)
- I learned the necessity of thinking how to think and have verbal communication with the audience. I was motivated to tell my opinion and ask questions more freely rather than being just too cowardly or timid to speak in public. (Piano major, 1st year, graduate school)



She also answered students' questions.

All these words are from participants of Kobe College.

Part of the 2009 Program for the Support of Strategic University Collaboration towards University Education Enhancement
Initiated by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology (MEXT), Japan

Music Schools Partnership Program Leadership in Music Communication <http://www.music-communication.com>

Kobe College, Showa University of Music and Tokyo College of Music have made a partnership, with the support of the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, Japan, to develop a new framework of music education through sharing of research resources, exchange students and the faculty, and cooperation with related organizations. With this framework, this program serves undergraduate students in music majors of three schools to nurture them to become "Music Communication Leaders" with the deep understanding towards music, the power to understand people and connect them, and the ability to solve problems and to be able to adapt themselves in any professional situations.

Goals:

1. Nurture the leaders who can create and carry out musical activities in the community combining their music excellence, communication and social skills together
2. Strengthen the skills of undergraduate music majors
3. Improve the quality of education / research in music schools
4. Revitalize the local community

Programs:

1. "Music Communication" class
New elective class throughout an academic year (for credit)
Same curriculum for three schools
Interactive lecture using the IV (Internet-Video) Conference System
2. Summer Seminar
3 days seminar in Tokyo with the guest speakers from abroad
3. Joint and/or affiliated projects (concerts, workshops...etc)
4. Teaching materials and case studies development

For inquiries, please feel free to contact Dr. Reiri Kojima, Coordinator of LCM program.

[Contact]
Dr. Reiri Kojima, Program Coordinator / Research Fellow
Tokyo College of Music LCMC Center
3-4-5 Minami-Fushokura, Toshima-ku
Tokyo 171-8540 JAPAN
Tel: +81-(0)3-3982-3513 Fax: +81-(0)3-3982-3227
Email: reiriko@music-communication.com

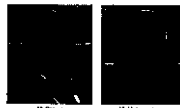
A 2009 Program for the Support of Strategic University Collaboration towards University Education Enhancement
Initiated by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology, Japan

Joint Project of Three Colleges of Music
Leadership Training through Music Communication
Kobe College / Showa University of Music / Tokyo College of Music
Report on the Second Joint Trial Lecture

Artists who Grow in the Community - Successes of Young Artists

18:30-20:00 at the South Bldg., Showa University of Music Wednesday, Dec. 2, 2009

The second joint trial lecture was held on Wednesday, Dec. 2 at Showa University of Music, entitled "Artists who Grow in the Community - Successes of Young Artists" with two lecturers: Ms. Osamu GIZAWA, Director of Japan Foundation for Regional Arts-Activities & Artists Arts Foundation, and Ms. Ryo MATSUMOTO, young violinist. First, Mr. GIZAWA explained how public halls in Japan have increased in number as a background for expanding outreach activities. Then, with Ms. MATSUMOTO, the audience viewed a DVD on the activities of the Japan Foundation for Regional Arts-Activities and how they are revitalizing public hall programs with music. Ms. MATSUMOTO then introduced her experiences of joining such outreach activities of the Foundation. Two lecturers also held a talk session and told about their own concerns and improvement of the role of outreach activities, how they have developed and expanded them, with concrete examples. This online lecture concluded with a Q & A session, in which students of the three colleges actively asked questions via the Internet video conference system.



Mr. GIZAWA

Ms. MATSUMOTO

Comments from participants

- I felt the importance and merit of human network. (Art management course, freshman)
- The experience of the two lecturers taught me many things. I was impressed, in particular, by their words: good outreach activities are able to change children's lives. (Piano course, junior)
- It was a very meaningful lecture, which told us the origin and role of outreach activities. I noticed that outreach activities are activities to nurture the relationship between the community and artists, and promote mutual development. (Art management course, freshman)
- I learned a lot about improving my own stage. For example, we do not need to carry flows with the audience. (Piano course, junior)
- I myself have a wish to not only hold my own concert as an artist but also to produce stages of classical music for children. So, the DVD told me lots of things. (Instrument course, freshman)
- The works of the stage staff and artists have many things in common. I will remember this to create a good stage. (Stage staff course, freshman)
- I learned a lot about how to select program members, talk to the audience, and communicate with them. Being told the fact that artists also learn a lot from children and seeing their happy faces, I myself would like to work for them. (Instrument course, freshman)
- I was a fresh experience for me to attend the same online lecture with students from different sites. I would like to have many more experiences like this. (Instrument course, freshman)



—Thank you for holding this kind of very meaningful lecture. It made me think about the future of outreach activities, as I know it is our role to continue them in the future. In this sense, I learned a lot from this lecture. (Management course, freshman)

—It's very appealing as I think these kinds of activities will be further demanded in the future world of classical music. I will make the most of what I have learned today for my future career. (Instrument course, freshman)

All these words are from participants of Showa University of Music.

School of Music, Kobe College Outreach in Music Social Learning

Adopted as a "Good Practice" in 2005 by
The Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology



Provide primary/junior high school children with pleasant musical experiences
Hold concerts at hospitals and museums with music programs matching the season or exhibition theme
Stage a children's concert series (*Enjoy Concerts with Children*)
We aim to play music at various social venues to energize both the region and university life.

For inquiries, contact the Outreach Center, School of Music, Kobe College
4-1, Okadayama Nishinomiya-shi 662-8506
Phone: 0798-51-8584 Fax: 0798-51-8661
outreach@mail.kobe-c.ac.jp
<http://www.kobe-c.ac.jp/musicdp/outreach/>

The Outreach Center was opened on October 1, 2005

The School of Music at Kobe College celebrates the 100th anniversary of its establishment in 2006.

Activity Record from 2002 to 2005

Year	Kobe College	Pr
2001	A children's concert titled "Play"	F
2002	Star Festival Concert 196 participants Organ Concert 280 participants Christmas Concert 662 participants Campus Visit by Nishinomiya City Hirota Primary School 5th graders (pipe organ)	S S Ai P Ni S K A Ni S Ni S A T
2003	Star Festival Concert 255 participants Special Concert 335 participants Christmas Concert 1,198 participants	School 4th graders
2004	Star Festival Concert 448 participants Special Concert 336 participants Christmas Concert 1229 participants Music Session Meeting of Hyogo Prefecture Private School Study Group, (Program for Experiencing Pipe Organs)	Hibarigaoka Gakuen Primary School 5th graders Amagasaki City Kamisakabe Primary School (two sessions for 4th/5th graders and 6th graders) Kobe College Junior High School first-year students Nishinomiya City Danjo Primary School 4th graders Nishinomiya City Nishinomiya Junior High School second-year students Takazuka City Sumiregaoaka Primary School (three sessions for 3rd, 4th, and 5th graders)
2005	Star Festival Concert 568 participants Special Concert 262 participants Christmas Concert 1038 participants	Primary School attached to the Faculty of Education, Wakayama University 6th graders Amagasaki City Kamisakabe Primary School (5th graders) Kobe College Junior High School first-year students Nishinomiya City Asore Kindergarten

Opinion Exchange Meet Support Nishinomiya	"Health Festival" at Ch Phono Anthology Concert (a Mahe Villa Kobe Area) (a project selected as "Art Kobe Cultural Foundation") Opinion Exchange Meet Support Nishinomiya
Star Festival Concert at Hospital "Health Festival" at Ch Christmas Concert at T Church Opinion Exchange Meet Support Nishinomiya (M/C/Summary)	
Kobe City Museum (exhibition and concert of the at Seimmar) Nishinomiya City Integ Child-Raising Koto Day Service Center for senior citizens)	

90 participants Special Concert 365 participants Christmas Concert 1011 participants Spring Special Concert 550 participants	Hyogo Prefecture Koyasato School for Handicapped Children Nishinomiya City Kosen Kindergarten Osaka YMCA International School Hibarigaoka Gakuen Primary School 5th graders Ashiya City Nishiyama Kindergarten
Star Festival Concert 723 participants Special Concert Kobe: 365 participants Tokyo: 328 participants Christmas Concert 751 participants	Nishinomiya City Shukugawa Kindergarten Takaha Kindergarten Hibarigaoka Gakuen Primary School 5th graders Nishinomiya City Taisha Primary School (Jan.31 in 2009)
Star Festival Concert 814 participants Special Concert 226 participants Christmas Concert 818 participants	Nishinomiya City Shukugawa Kindergarten Nishinomiya City Hsukaze Kindergarten Hibarigaoka Gakuen Primary School (Mar. in 2010)

Other facilities/organizations Osaka City General Hospital National Hospital Organization Kobe Medical Center (two sessions for August and December) Kobe City Medical Center General Hospital (two sessions for September and November)	Nogi Hospital Mission Nishinomiya Najo Kobe Aiselen (a facility for handicapped people) Osaka Medical Center for Cancer and Cardiovascular Diseases Kobe City Medical Center General Hospital (two sessions for September and November) Hyogo-Chuo National Hospital National Hospital Organization Kobe Medical Center Toneyama National Hospital
	Koto Day Service Center (a daycare facility for senior citizens) Kobe City Medical Center General Hospital (two sessions for September and January) Hyogo-Chuo National Hospital (Feb.4 in 2009) Toneyama National Hospital (Feb.26 in 2009)
	Nogi Hospital Toneyama National Hospital Kobe City Medical Center General Hospital

Outreach in Music Social Learning

Motomi Tsugami
Professor at the School of Music

1) Project Outline

The Outreach Project at the School of Music, Kobe College, encourages students to study music subjectively by freeing musical education from its conventional academic or concert hall framework. The word "outreach" signifies "to reach further," or "to step out from the normal range."

In order to perform at everyday locations such as primary/junior high schools and hospitals, musicians must produce programs that quickly engage the audience. Therefore, the aim of this project is to help students develop their self-production, communicative, and management abilities, based on a mutual understanding with others.

This can also be called "community-based art management by musicians," since it is produced by the music students themselves. At the same time, music students can be provided with regional internships, which develop students' career prospects while practicing the motto of Kobe College: "Love Thy God, Love Thy Neighbor."

2) Project Processes

This project was first introduced after a nine-month discussion by the faculty committee for curriculum reform, based on surveys done with both the graduates and current students of our School of Music, as well as two hundred and two nearby primary and junior high schools.

Since the second semester of 2001, lectures titled "Outreach in Music" were given to the junior students of the Undergraduate School of Music. In 2002, practical training on that theme was started with senior students. The chart on the following page briefly explains how students learn at each stage of the project.

Students who enter the School of Music at Kobe College study harmonics, music history, and other classes, in addition to performance lessons for their major instruments. At the same time, they take high level classes in general education courses such as linguistics, liberal arts, and science, making the most of the merits of studying at a small college. In the second semester of their junior year, students learn the basic concepts of the Outreach Project and how to plan appropriate programs for outreach concerts.

In their senior year, students start to prepare for leaving the campus for their practical training. First, they contact those requesting their services (such as schools and hospitals), hold discussions with them, grasp their expectations, and examine the venue. Next, they design programs for the concerts and reconsider them before making suggestions for further discussion.

Students also make a time schedule for practices,

arrange methods for transporting necessary musical instruments, repeat practical lessons, and do rehearsals up until the day of the concert.

After the concert, students hold a review meeting and submit reports on which their evaluation for credits will be based. Evaluation is done for each student based on daily contributions to class discussions, quality of the programs, arrangement techniques, performance results, and the quality of the report.

There are three major activities: 1) to provide primary and junior high schools with a concert where children experience playing musical instruments, 2) to provide hospitals and museums with concerts, with programs matching the season or the exhibition theme, and 3) to host concerts for children at the Kobe College campus. We have already dispatched forty-one outreach programs to local primary/ junior high schools, held thirty-five concerts at hospitals and other facilities, and hosted twenty-seven concerts for children (twenty-six sessions as part of a series) in the past eight years. Please refer to the back page for the details.

3) Project Merits

How do students mature through this project?

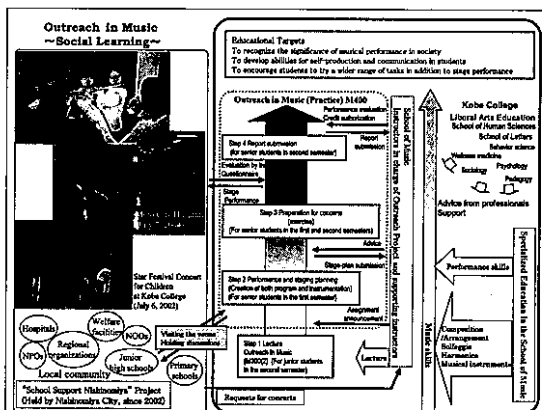
Each year, senior students at Kobe College participate in many major events, such as student teaching, nursing care practical training, and piano solo recitals (one of KC's superb traditions), in addition to their daily classes and lessons.

Furthermore, students who take part in the Outreach Project have the responsibility of performing well at concerts outside the campus. In other words, they are required to organize both their schedules and maintain their physical condition, while working together as a team.

The most important point is that students must understand themselves from the viewpoint of others. In the past, music education at colleges only required students to pursue skills that allowed them to play difficult musical works. However, with audiences not accustomed to formal concerts, musicians must make a paradigm shift, composing programs even children who do not know.

This activity subjectively re-creates the music through a deep and understanding with other people is necessary to have the ability, based on an understanding of other knowledge of musical instrument repertoire, and 4) strengthen co-

Through discussions and open school teachers and college pro develop multifaceted and flexible. Furthermore, the mutual relationship teaching and learning lets students joy and significance of playing in from the bright faces of children into contact with musical instrument experiences motivate students to



4) Project Organization

Each process is taught by lecturers in charge of the Outreach Project. Arrangements and acoustic balance on stage are taught by Conducting or Music Composition teachers. For musical instrument performance, teachers of piano, vocal music, violin, flute, harp, organ, percussion, and other instruments cooperate with this project.

This project also works together with local organizations such as schools and hospitals. In particular, the Nishinomiya City Board of Education has been working with us for their project, "School Support Nishinomiya," which started in 2002. Our school of Music participate in its annual school-year-end event as a registered member.

5) Project Effectiveness

Many students rate this Outreach Project very highly in terms of effectiveness and intellectual stimulation in their general assessment of their class evaluation, although they sometimes say that it is too demanding or difficult.

This project urged some enthusiastic students to learn more about how their instruments were developed or constructed, making for an excellent program. Some groups created original instruments made by paper to make the most of the waiting time during instrumental events. Some became extremely good at speaking in public. Others expanded their social viewpoints after confronting various social and educational issues, such as the declining birth rate and aging population of the region.

Some students got jobs at cultural halls in Mie, Shiga, or Kyoto prefectures so as to continue similar activities in different regions even after graduating

from the College. Extracurricular activities such as mini concerts, in which students invite graduates or those who do not take the course to participate, are increasing in number these days. The effects of this project are truly expanding beyond its immediate participants.

This project has also been welcomed by local residents. The audience for children's concerts is increasing every year. There are several schools which ask us to visit almost every year.

6) Future Plans

These opportunities for subjective social learning combine formal education with non-academic venues, and have made possible a wide range of artistic education. The merging of the two helps students mature and leads them to make genuine social contributions. At the same time, it develops their abilities in various ways, while also nurturing their career goals after graduation.

However, there is much more work to do: we have to upgrade the quality of the Outreach Project, flexibly react to requests from hospitals, and expand this project to graduates.

To realize these improvements, we need a larger staff. Furthermore, classes should be networked with developmental psychology, and the number of musical instruments for practical events should also be increased.

The role of art continues to expand in modern society. Art has the potential to positively channel human expression. Not only music departments, but those in many other artistic fields, should recognize this and maintain good relations with local society. This is part of the social mission of the College for exploring a brighter future.



[Showa University of Music and "Arts in Community" Program]

Showa University of Music was established in 1984 and has about 1,000 students in its four departments: Dept. of Composition, Dept. of Instrumental Music, Dept. of Vocal Music, and Dept. of Music and Arts Management. It is part of the Tosei Gakuen Educational Foundation. The foundation also has a two-year Showa College of Music (established in 1989) with 500 students. The University and the Junior College moved from Atsugi-city to Shin-yurigaoka, Asao-ward in the northern part of Kawasaki-city, Kanagawa Pref. in April, 2007.

The "Arts in Community" program started in conjunction with the relocation of the University. The program represents the university's commitment to the development of human resources through art and cultural interactions with the community.

[Mission]

The "Arts in Community" program aims to train musicians "to grow with the community" by "learning with people in the community" through art and cultural interactions in the Asao-ward, also known as the "Geijutsu-no-Machi"(Art-based Town), of Kawasaki-city, the "Ongakunomachi Kawasaki"(Kawasaki-a City of Music).

The Showa University of Music offers a wide range of courses, including theater musicals, ballet, music therapy, arts management, and stage staff, in addition to instrumental, vocal, piano and music composition. The "Arts in Community" program aims to train musicians to develop good communication skills, excellent manners, discipline, and exemplary social competence through the interaction with students majoring in various courses and active involvement with leaders in the community.

[Characteristics]

A primary characteristic of this program is that, in addition to training music and performing skills, it also reaches out to the community to help its revival by experiencing the beauty of music.

The "Arts in Community" program consists of two main pillars: "Lectures" and "Activities". "Lectures" – encourages students to acquire self-expression, program

January, 2010 Showa University of Music

communication skills, as well as to learn the social aspects and the diversity of music and arts from a broad perspective. "Activities" – students acquire social skills through community-linked activities, such as concerts, tutorials, wellness and arts management. This community-oriented university program is expected to help revitalize the Shin-yurigaoka area and further strengthen the relationship between the university and the community.

[Educational Benefits]

"Music comes from hands-on experience" – this phrase has been regarded as a foundation for the educational activities in the Showa University of Music. The "Arts in Community" program, which targets development of human resources with music expertise, social competence and communication skills acquired through performances, education and social activities in various forms, is consistent with the university's educational policy of encouraging students to experience as many opportunities as possible for performances and participation has while in the university. The integration of educational and practical activities has significant educational benefits, especially for helping students build their careers.

In Japan, a program targeting resource-leveraged interactive cooperation with the community at the same time promoting career building for musicians is a new unique territory for music universities. The approval of the "Gendai-GP" program¹ in 2006 by the Ministry of Education signifies great hope for the future development of "Arts in Community".

We hope to develop this program in a step-by-step manner, reinforcing the relationship with local municipalities and cultural organizations, enhancing efforts to train musicians to "grow with the community" and helping people in the community feel the joy of living in an art-based town.

¹ "Gendai GP" (Contemporary Good Practice) is an educational program offered by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, which supports projects in undergraduate programs. Outstanding project proposals from universities are selected to receive financial support.

January, 2010 Showa University of Music

Consortium for Educational Outreach
At Conservatories and Music School
January, 14th, 2010

ACT Project @ Tokyo College of Music

www.act-tokyo-ondai.jp

Ultimate Problems for graduates from conservatories and music schools

1. Difficulty of making a living as a professional musician
2. Competitive recruitment to become music teachers in schools due to the low birth rate

Problems Conservatories and music schools in Japan are facing today

1. Too much emphasis on studio works not class lectures
2. Very few opportunities to share own thoughts and experiences or even just to communicate with students and faculty outside of their own instruments
3. No practical training on how to make a use of what they are learning in school

Tokyo College of Music

Established in 1907, Tokyo College of Music is the oldest private music institution in Japan with 4 courses in music major, Voice, Instruments, Composition/Conducting, and Music education. The mission is "to contribute the creation and development of the music culture", "to be the hub for the music culture from Japan and Asia", and "to provide the place for pursuit of truth and self-realization". With this, the school aims to nurture the high level professional musicians and music educators through the learning of arts music and personnel who are well-educated musically and generally and are equipped in any situations today.

ACT Project

Started in 2006, with the grant from the Ministry of Education, Japan
Application and interview required
Approx 30 students involved each year as a member
3 faculty and 4 administrative staffs

Goals:

1. Nurture the finest musicians
2. Enable these musicians to
 - have awareness of their roles in the community and the by using the music.
 - have the ability and basic skills to create their own member of the society.

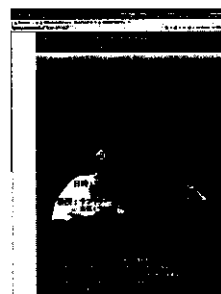
Consortium for Educational Outreach
At Conservatories and Music School
January, 14th, 2010

How?

- To work with the people in the field through planning and producing the concerts
- To work as a team with other members involved with the project and faculty
- To work as management
- To have active discussion and exchange ideas with others

Activities:

1. Concert planning and producing for the public and private concert halls
2. Producing the chamber music series at the school's lobby (open to public)
3. Outreach program planning and producing for the community
4. Creating and managing project's website



Results we have seen so far:

1. Selected as one of the schools to produce the concert in the Suntory Hall under its educational program for 9 consecutive years
2. 8-10 concerts in the Chamber Music Series at the Lobby every year
 - Developing regular audiences from the community
 - Partnering with the Toshima ward
3. 15-20 outreach programs every year
 - Finding the strong needs from nursery schools and elementary schools
 - Developing the regular clients
4. Website, operated by the students
5. Growth of the member students with their communication skills, computer proficiency, problem-solving abilities, and the capacity of teamwork.

Challenge:

Finding the better ways of engaging and communicating with various audiences from the community

1-4 Chamber Music America

(CMA: アメリカ室内楽協会)

2010年1月14日から17日の4日間にわたり開催された、第32回アメリカ室内楽協会 (Chamber Music America、通称 CMA) 全国大会に参加する機会を得ることができた¹。本稿では、本大会の様子を報告する。

1. 会議概要

CMA は 1977 年に設立された 501 (c)(3) 認定のサービス組織で、現在は 8,000 を越える個人・団体が会員として登録している。助成金や専門能力向上のためのセミナーのみならず、楽器保険や健康保険の提供も行うなど、室内楽²に関する唯一の団体として活発な活動を行っている。毎年1月に行われる全国大会は、全米並びに世界各国よりコンサートホール、マネジメント会社、ブッキングエージェンシー、実演家団体関係者から作曲家、演奏家などが集まる。

ウェスティン・アット・タイムズスクエアを会場に、「小編成アンサンブルを提供するための素晴らしいアイデア」(Big Ideas for Presenting Small Ensembles) をテーマとした講演、セミナー、ワークショップ、ショーケース、展示会、情報交換会などが行われた。以下が、本大会のスケジュールである。

1月14日

夕方 初回参加者オリエンテーション

1月15日

午前 セミナー&ワークショップ

講演 (スティーブ・ライヒ)

午後 会員ミーティング

アンサンブル・ショーケース

展示会

開会レセプション

1月16日

午前 セミナー&ワークショップ

講演 (レオン・ボトスタイン)

午後 展示会

アンサンブル・ショーケース

講演 (チック・コリア他)

夜 チック・コリア

トリビュート・コンサート

1月17日

午前 ネットワーキング朝食

セミナー&ワークショップ

午後 アンサンブル・ショーケース

レセプション

CMA/ASCAP アワード

チック・コリアへのインタビュー

授賞式

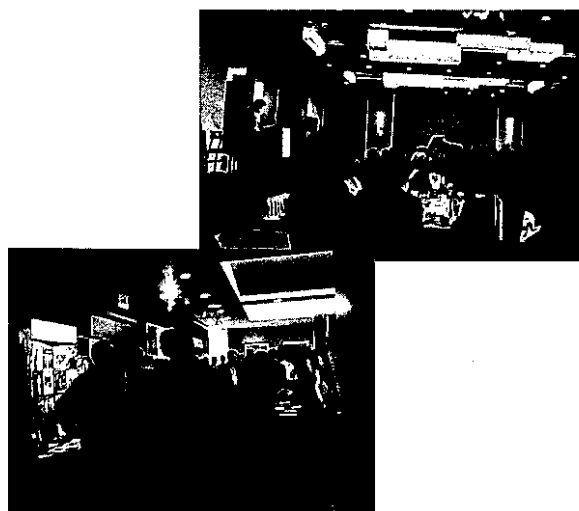
2. 講演

本大会における講演では、スティーブ・ライヒ、レオン・ボトスタイン Leon Botstein、チック・コリア 3 名が、自身の音楽観そして音楽が歩むべき方向性について語った。ライヒは、芸術として音楽が存続していくためには、音楽に関わるもの全員が発明家的発想を

¹ 参加メンバーは、小島レイリ (東京音楽大学連携コーディネーター)、津上智実 (神戸女学院大学教授)、武蔵京子 (昭和音楽大学准教授) の 3 名。

² CMA では「室内楽」という言葉を「一般的に指揮者なしで、演奏者が各パートを演奏する、小編成アンサンブルのための音楽」という意味で用いている。歴史的にはクラシック音楽特有の単語として使用されているが、CMA ではその他の様々な音楽ジャンルにもこの言葉は適用可能であるとし、「協同の精神を持つ芸術形態」を指すとしている。そのため、近年 CMA ではジャズに力を入れている。

する必要があるとし、特に室内楽奏者は起業家精神が重要であり、新しいことを創造する力がなければ難しいと述べた。ボトスタインは、スタンダードとなっているクラシック音楽のレパートリーを録音することに疑問を投げかけ、ライブ公演と新しい音楽を提供することの重要性を主張した。2010年のCMAリチャード・J・ボゴモルニー賞受賞者であるチック・コリアは、ジャンルを考えて創作・演奏活動をしているわけではなく、自分がやりたいことを行ってきたまでと語り、むしろ誰と演奏をしたいかによって様々な作品が生まれたと述べた。興味深かったのは、ライヒとコリアという一見対照的な2人が、自身の創作活動において、人が与えてくれるインスピレーションの大きさについて語ったことである。ライヒはクラシック音楽を勉強した若手奏者が演奏する他ジャンルや新しい演奏方法に刺激されて新作を創り、コリアは素晴らしい奏者と一緒に演奏したくて、その人たちと一緒にできるような作品を書くという。ライヒとコリアが言うように新しい音楽はコミュニケーションから生まれ、ボトスタインの言うように、その音楽がライブで演奏されることで新しいコミュニケーションが生まれるというように、3名の講演は1つのサイクルとなって、音楽のあり方を定義するものとなった。



会場の様子

3. セミナー&ワークショップ

本大会では、「プログラミング（企画）」「教育」「提携」「聴衆参加」の4つのテーマに沿って、3本ずつセミナー&ワークショップが行われた。筆者が出席したのは、「聴衆の見つけ方、保ち方」（聴衆参加）、「アウトリーチの最先端」（教育）、そして「CMA オンライン・カリキュラム・ガイド」（教育）である。

「聴衆の見つけ方、保ち方」のセッションでは、コンサートホールを中心とした聴衆開拓方法のデモンストレーションと事例共有が行われた。スピーカーからは自身の成功例でもある、聴衆参加型プログラムを企画に盛り込む提案がなされたが、フロアからはそれぞれの成功例の紹介が行われ、Eメール活用方法やホームページへの誘導方法など、現場に携わっている参加者ならではの事例が次々に挙げられた。また、セッション後に更なる情報交換に盛り上がる会場は、活気にあふれていた。

「アウトリーチの最先端」では、NETM-CDO 及び CEOCSM にも出席していたマリアン・リーボヴィッツと彼女の教え子であるセシリア弦楽四重奏団が講師を務め、地域社会活動と演奏専攻学生へのキャリアトレーニングの両立のあり方について議論を行った。

「CMA オンライン・カリキュラム・ガイド」では、現在作成中であり、2010年内に公開予定となっているアンサンブル向け教育活動資料ホームページのコンテンツ検討を行った。様々な情報を集約したものになる予定で、各州の指導基準の明確化や他教科への適用の可能性など、様々なリソースが紹介されるという。演奏家全員が、必ずしも教育プログラムを行うにあたって適切な指導や教育を受けているわけではないため、教科書代わりとなり得る重要なサイトとなることが期待される。

4. ショーケース

クラシック音楽7グループ、ジャズ7グループ、コンテンポラリー6グループの計20グループによるショーケースが行われた。プレゼンターにとってはブッキングの機会であり、作曲家にとっては自身の作品を演奏してくれるグループを探す機会であるため、できるだけ多くのグループを聞こうとする参加者の姿が見受けられた。

5. 展示会

マネジメント会社、ブッキングエージェンシーを中心に、楽譜出版社、実演家団体などがブースプレゼンテーションをするもので、数は100弱と多くない。APAPにはなかった作曲家団体がブース出展しており、作曲家の室内楽への関心の高さがうかがえた。



6. ネットワーキング

CMA 全国大会では、ネットワーキングの機会が1日に最低1度はとられていた。オリエンテーション、ランチ、コーヒーブレイク、ネットワーキング朝食など、意見交換・情報共有の場が多いため、必然的に知り合いは増える。これが重要だと参加者の多くは言う。筆者のメンター³は「ビジネスをしにくるのではなく、知り合いに会いにくるのがCMA」だと言っていた。近況を報告しあい、

問題を共有することで、解決策にたどりつくことができるという。また、知り合ったもの同士が関心分野の似ている人を紹介しあうこともあるため、常に新しい人と話している状態が会期中は続く。それだけ参加者1人1人が同じ情熱を持った人とのつながりを大切にし、そこから新しいものを創り出そうとしているのだと言えよう。

7. おわりに

対象分野が音楽に限られていることから、7ページで報告したAPAPに比べて規模は小さいが、より親しみやすい雰囲気を持つ会議であった。

具体的な内容のセミナー&ワークショップや第一線で活躍するアーティストの講演などから、多くの情報を得ることができたと言えるが、なによりも関係者とのネットワーク構築ができたことが、一番の収穫だった。連日深夜まで関係者と意見交換をし、お互いのプロジェクトに対する提案などを行ったが、これは音楽振興を共通目的とする仲間という意識があるからできることだろう。当プロジェクトに対しても多くの提案やアーティスト・講師派遣の申し入れを受けた。「会議に出席することは、ネットワーキングをすること」と、本大会に出席して10年以上経つメンバーが口をそろえて言っていたが、今後はここでできたネットワークを発展させながら、3大学連携事業に生かしていけたらと思う。

(小島レイリ)

³ メンターは、CMA年次総会に初めて参加するメンバーの相談役となるメンバーで、ボランティアベースとなっている。ほとんどがCMAに10数年参加しているベテランで、初回参加者の持つ疑問点をクリアにするだけでなく、総会をそれぞれのキャリアにどのように活用すべきかなど個人アドバイスなども行う。

1-5 The Academy (アカデミー)

アカデミー (The Academy) は、カーネギーホール、ジュリアード音楽院、ワイル・ミュージック・インスティテュートがニューヨーク市教育局との連携の下に運営している、若手音楽家を対象としたリーダー養成プログラムである。スタートから3年というまだ新しいプログラムであるが、3大学連携が目指す「リーダー養成」並びに「地方自治体・文化施設・関連団体との協働」のあり方に大きな示唆を与えうるものであり、先駆的事例として注目すべきプログラムであることから、関係者へのヒアリングを実施した¹。本稿では、2010年1月20・21日に行われたエイミー・ローズ Amy Rhodes・ディレクター、レイチェル・ソコロウ Rachel Sokorow・プログラム・マネージャー、ジャスティン・ハインズ Justin Hines・メンターへのヒアリングをもとに、プログラムの紹介をしていきたい。

1. 概要

アカデミーは、カーネギーホール、カーネギーホール教育部門であるワイル・ミュージック・インスティテュート²、ジュリアード音楽院そしてニューヨーク市教育局の連携プログラムとして2007年1月にスタートした。トップレベルの若手音楽家を対象とした2年のフェローシップで、今日の演奏家は高いレベルでの演奏能力とともに、地域社会へ還元能力を併せ持ち、次世代の音楽家や音楽愛好家に影響を与えることが求められるようになるという信念のもと、芸術性の高い演奏

を行いながらも、教育や地域社会へ密接に関わることができ、その中でもアドボカシーとしてリーダーとしてキャリアを築いていくことのできる人材の育成を目標としている。

2. 設立背景

本プログラム創設のイニシアティブをとったのは、カーネギーホールのエグゼクティブ・ディレクター兼芸術監督のクライブ・ギリソン Clive Gillisonであった。ロンドン交響楽団事務局長³だった彼は、カーネギーホールにはワイル・ミュージック・インスティテュートという教育活動を中心に行う機関があるにも関わらず、その活動の核となる音楽家が存在しないことに危惧を感じ⁴、ディレクター就任直後よりホールとしての人材育成の可能性を探っていた。ホールが単体で行えることには限界があり、教育機関の協力を仰ぐことは必要不可欠という考えのもと、「音楽と教育に対する情熱が似ていて、同じ歩調で物事を進めていける」⁵ジョセフ・W・ポリッシ Joseph W. Pollisiが学長を務めるジュリアード音楽院に、養成プログラム共同設立を打診した。ギリソン、ポリッシの両名はこのプログラムを通して、音楽家のパラダイム改革、「地域コミュニティに対して責任のある音楽家」⁶という考えを浸透させることを目標とし、プログラム構想に取り掛かった。

¹ ヒアリング実施者は、小島レイリ (東京音楽大学連携コーディネーター) 1名。

² ワイル・ミュージック・インスティテュート Weil Music Instituteは、当時の理事長サンフォード・I・ワイルを記念して、2003年にカーネギーホール内に設立された教育部門である。ニューヨーク市周辺のみならず、米国内外の幅広い年齢、音楽バックグラウンドを持つ人々に対して、ホールの持つリソースを活用した画期的なプログラムを展開している。日本ではサントリーホールと提携を結んでいる。

³ クライブ・ギリソンは、1970年にロンドン交響楽団 (LSO) のチェリストとしてオーケストラでのキャリアをスタートさせるが、1976年には理事兼財務部長に就任。1984年から2005年までは事務局長として、PMFの創立など多くのフェスティバルに関わるのみならず、CDレーベル設立や教育プログラムの大幅改革などを行った。

⁴ エイミー・ローズ (アカデミー・ディレクター) インタビュー、2010年1月20日

⁵ The Juilliard Journal Online Vol.XXII No.4, December 2006.

⁶ Ibid.

⁷ 2009年で15年を迎えたフェローシップ・プログラム。ジュリアード音楽院のアウトリーチプログラムの中でも、教育活動を重視したもので、講義受講のほか、週に1回、アッパーウエストサイドにある公立小学校で指導をする。

ポリッシがモデルとしたジュリアード音楽院のモース・フェローシップ⁷のみならず、NYの文化関連機関の行う教育プログラムは、ほとんどがNY市立学校との提携を行っていることから、2人はニューヨーク市教育局に提携依頼を行い、承認が下りたところで、本格的なプログラム構築に移った。2005年11月の着想からわずか13ヶ月で、トライアルプログラムのスタートに至った。

3. 運営体制

カーネギーホール内アカデミー部門により運営が行われており、常勤スタッフ4名はカーネギーホールのスタッフである。プログラム委員会並びにカリキュラム委員会では、連携各所の専門スタッフが委員を務めている。実質的な運営はカーネギーホールだが、ワイル・ミュージック・インスティテュートとジュリアード音楽院は人的・物的リソースの提供を行っている。

常勤スタッフ以外に、メンターと呼ばれる常勤スタッフとフェローの橋渡しを担うメンバーが約10名いる。彼らはリンカーンセンター、ニューヨーク・フィルハーモニックなどのティーチング・アーティストとして、すでに演奏と並行して教育や地域社会活動でもキャリアを築いた30代の演奏家で、アドバイザーの役割を果たしている。メンターは推薦のみで雇用されるため、公募はされない。

4. 財源

提携先であるNY市教育局からは、コンスタントに補助金が付与されているものの、主な財源はアンドリュー・W・メロン財団などの財団や、個人寄付、企業となっている。不況により大きく影響を受けやすい財源であるため、2009年春には大規模な事業見直しが行われた。

5. フェロー

5-1. 対象者

フェロー対象者は、音楽大学もしくは音楽院の卒業生であるが、ほとんどのフェローが修士もしくは博士学位を保持しており、学部卒業後すぐにプログラムに参加するというのは稀なケースとなっている。プログラムの要求する高い演奏レベルと社会性、指導能力を持ちながら、各活動へ積極的に取り組むためには、学士では難しいのだろう。現在フェローの平均年齢は26歳。卒業大学は、カーチス音楽院、イーストマン音楽学校、ジュリアード音楽院、マンハッタン音楽院、マネス音楽院、ニュースクール・フォー・ミュージック、ニューイングランド音楽院、サンフランシスコ音楽院、ストーニーブルック大学、イェール大学音楽学部などである。

対象楽器は器楽全般で、現時点で声楽は含まれていない。これはギリソンがオーケストラのバックグラウンドを持っていたためでもあるが、構想期よりギリソン、ポリッシ両名がオーケストラ奏者、つまり器楽奏者のあり方に変化をもたらすことを望んだためとも言える⁸。

5-2. オーディション

現在では、2年に1度、公募による選考が行われており、2009年秋冬にかけて募集された第4期生（2010年9月～2012年7月）は書類審査中で、20人募集のところへ250人の応募があった⁹。オーディションは4つの段階に分けられており、書類審査、ソロ演奏レベルをチェックする第1次審査、アンサンブル演奏レベルやコミュニケーション能力をチェックする第2次審査、そして最も重要視されている面接が最終審査となっている。ローズ・ディレクターによると「面接では、

⁸ Ibid.

⁹ 3月にカーネギーホールでの演奏オーディション並びに面接を行う予定とのこと。

そこでどんな人間なのか、どんなことに関心があるのか、なぜこのプログラムに参加したいのか、そこにはどんな意味があるのかを聞いていく」¹⁰という。「関心があると口にするのは簡単だが、とてもハードなプログラムのため、深い情熱を持っているということが必要不可欠」¹¹であるゆえ、演奏レベルもさることながら、面接に力点が置かれている。

第1期生（2007年1月～2008年6月）並びに第2期生（2007年9月～2009年6月）に関しては、トライアル時期だったこともあり公募の形はとられず、第1期はジュリアード音楽院卒業生とワイル・ミュージック・インスティテュート主催プロフェッショナル・トレーニング・ワークショップ参加者の中から16名が、第2期では各音楽大学や音楽機関から推薦を受けた20名がフェローとなった。この時期は、あくまでカリキュラム・トライアルとして、ある程度の知識と経験がある若手音楽家を選ぶことが優先されたためと考えられる。

5-3. ベネフィット

フェローには1年間24,818ドル（約223万円、1ドル=90円換算）の奨学金、毎月の地下鉄定期、そして健康保険が支給される。また、ジュリアード音楽院施設へのアクセスが可能となり、リハーサル室、図書館、コンピューターラボなどが自由に使用できるほか、ジュリアード音楽院教授陣やカーネギーホールに来るアーティストからの指導や個人レッスンが提供される。

6. カリキュラム

アカデミーのカリキュラムは、演奏、講義、学校での指導、レジデンシーの4つの柱で構成されているが、学校ではないこと、そして創立まもないことから、まだ固定されたカリ

キュラムはない。特に現在、2010年秋からの新規生向けにカリキュラム編成の最中という¹²。そのため、ここに挙げるものは2009年度までに行われたものをまとめたものとなる。

6-1. 演奏

フェローはACJW（The Academy-Carnegie Hall, Juilliard School, and Weil Music Institute）アンサンブルとして、年に10回程度コンサートを行う機会を与えられる。競争の激しいニューヨークでは、演奏の機会を見つけることは難しいが、スタッフがカーネギーホールやジュリアード音楽院のみならず、NY市内の様々なホールでの一般的な室内楽コンサートから、公立小学校でのインタラクティブ・コンサートまで、様々な形態でのブッキングを行い、演奏機会を提供している。2009年冬からはフェロー自ら企画をする新しいシリーズが、ル・ボワソン・ルージュ¹³でスタートした。

6-2. 講義

講義は、内容ごとに以下5つのクラスに分かれている。1)インタラクティブ・パフォーマンス、2)リーダーシップ、3)企画、4)パブリック・スピーキング、5)生徒を参加させるクリエイティブな方法である。

「インタラクティブ・パフォーマンス」では、それぞれ異なる4つのグループにメンバーとして所属し、そのグループごとに、インタラクティブ・コンサートを台本作成から担当していく。ここにはメンターがつき、エ

¹² エイミー・ローズ（アカデミー・ディレクター）及びレイチェル・ソコロウ（プログラム・マネージャー）インタビュー、2010年1月20日。

¹³ ル・ボワソン・ルージュ Le Poisson Rouge（通称LPR）は、伝説的なクラブThe Village Gate跡地にオープンしたパフォーマンス・スペースである。マンハッタン音楽院卒業生である作曲家／ヴァイオリニストのデイビッド・ハンドラー David Handlerとチェリストのジャスティン・カンター Justin Kantorによって創設された同スペースでは、音楽、映画、演劇、ダンス、美術などさまざまなジャンルにおけるポピュラーカルチャー・アートカルチャーの融合を目指し、連日コンサートやイベントが行われている。2008年9月のオープンからわずか1年半弱にもかかわらず、音楽業界内外にその存在は広く知れ渡っており、高い評価を得ている。

¹⁰ エイミー・ローズ（アカデミー・ディレクター）インタビュー、2010年1月20日。

¹¹ Ibid.

ントリーポイントの探し出し方、レポートリーの提案から指導、フィードバックまでを行う。それぞれのグループで行うことから、様々な人とのグループワークが体験できるだけでなく、各フェローの担当校で実践することにより、異なる観客層における反応の違いを肌で感じることができる。「リーダーシップ」では、リーダーとしてどのようなスキルが必要か、どのようにリーダーとなるのかなどの講義が、ゲストスピーカーによって行われる。「企画」では、カーネギーホールの企画ディレクターより指導を受けると同時に、自身の企画をプレゼンテーションする機会が与えられる。これは将来的に室内楽グループやフェスティバルの芸術監督職に就くことを想定して行われている。また、2009年秋から始まったLPRコンサートはフェローが企画から携わることで、講義の実践の場となっている。「パブリック・スピーキング」では、いろいろな設定での舞台上スピーチ法を学び、「生徒を参加させるクリエイティブな方法」では、音楽の授業だけでなくほかの授業時にも活用できるようなアプローチ法などのテクニックの講義を受ける。

これらに加えてギリソンとポリッシとの小グループミーティングも講義の1つといえるだろう。ポリッシは音楽大学やオーケストラ、理事会などにおけるリーダーシップという切り口で様々な事例研究を行い、ギリソンは企画中心にミーティングを行うという。

教師陣は数名を除いて、基本的にはゲストスピーカー制をとっており、教科書もデビッド・ウォレス David Wallace の著書 *Reaching Out* やエリック・ブース Eric Booth の著書 *The Music Teaching Artist's Bible* 以外は、アカデミーアプローチが明記されているハンドブック程度となっている。

6-3. 公立小学校でのクラス指導

本プログラムの特色でもあり、核となるの

が、NY市立学校でのクラス指導である。各フェローは割り当てられた1校を期間中ずっと担当し、週に1度全日をその学校で過ごす。年間のべ36日をその学校での活動にあてるのである。基本的にはバンドなどの器楽指導を行うが、通常の音楽の時間を教えることもあり、ケースバイケースな上、子供の年齢も様々で、時には障害児クラスを担当することもあるという。

ジュリアードやNYフィルなどのプログラムとの大きな違いは、カリキュラム作成方法にある。一般的には、ティーチング・アーティストが作成してきたカリキュラムを入れ込む方法がとられてきたが、アカデミーでは担当の音楽科教師との共同でカリキュラムを作成する。そのためクラス状況や子どものレベルを把握した上での指導が可能となり、時には担当教師との協同指導を行うこともできる。

現在提携を結んでいるのは20校で、うち中学校4校、小学校16校となっている。学校側の申請に対して、視察とインタビューが行われ、提携可能かどうか判断されるが、どんな学校なのか、フェローはどのようなポジションになるのかなど、細かくチェックされる。週に一度のフェロー訪問に加えて、カーネギーホールイベント、ACJW コンサートへの無料招待や教師のための専門能力向上セッション受講などのベネフィットがもたらされる。参加費が参入障壁となることを避けたいという考えから、年間1500ドルの参加費は徴収するものの、うち500ドルは資料購入にとして返還されるシステムとなっている。

6-4. スキッドモア大学でのレジデンシー

NY市近郊だけでなく、スキッドモア大学及びNY州サラトガ・スプリング近郊での活動も、プログラムでは大きな比重を占めており、キャンパス内外での演奏活動から、同大学音楽学科生徒へのマスタークラス、レッスン、指導、周辺で活動する作曲家とのスコ

アリーディング・セッション、そして学校(K-12)訪問と、幅広く行っている。

をしていくか。これが、今後のプログラム展開の鍵となってくるのではないだろうか。

(小島レイリ)

7. 修了生の進路

2010年2月現在、34人の修了生を出したことになるが、多くは大学の講師ポジションを得たり、ワイル・ミュージック・インスティテュートでの活動をしたり、NYフィルのティーチング・アーティストになったりと、NYに残り演奏と教育活動を両立している。リーダーシップという面からは、その成功を図るにはもう少し時間がかかると思われるが、すでに全米各地から修了生の派遣依頼を受けている状態であることから、彼らが全米各地で活躍する日も近いだろう。

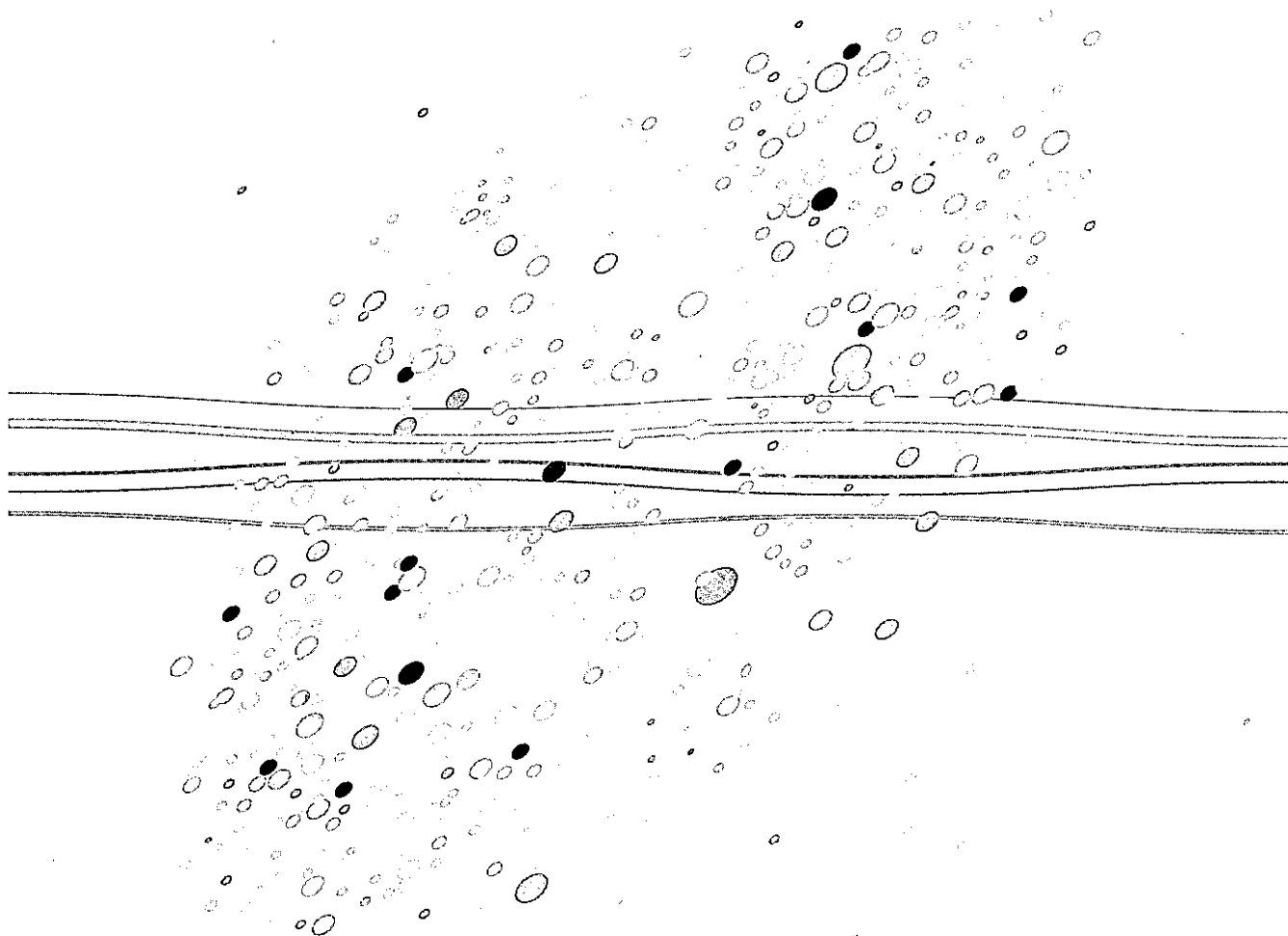
8. 今後の展開

設置から4年目を迎えるアカデミーは、今までの3年間で積み重ねたものを構築しなおし、プログラム自体を再編する時期にきているという。今までトライアルとしてやってきたものを、今一度制度化するのだという。アプローチ方法を変えるのではなく、オーディションシステムからカリキュラム構成まで、効率的な方法を洗い出すということである。

プログラムの評価は年々高くなっており、フェロー修了生派遣の依頼が多く、2009年夏には修了生によるACJWアンサンブルのドイツでの音楽祭出演、スペインでの新ホールオープニング出演、日本での教育プログラム実施が決定しているという。素晴らしい演奏家であるだけでなく、知識と柔軟性を持ち、環境や状況に合わせたプログラム作りができる人材だからこそ高く評価され、求められるのだろう。現在、修了生への出演依頼などは、アカデミー事務局でマネジメントを行っているが、今後のあり方を考える必要があるという。プログラム自体のシステム化に加えて、アカデミー・アプローチを習得した修了生たちを、どのように活用しながら彼らのキャリア支援

2. 音楽大学・音楽院アンケート調査の 紹介と分析

1-2 (NETMCDO) および1-3 (CEOCSM) の会議に先立って
主催者が実施したアンケート調査についての考察



2-1 米国の音楽大学および音楽院におけるアウトリーチプログラムに関する調査

本稿は、2010年1月14日に米国・ニューヨークにおいて開催された第4回「音楽大学および音楽院における教育アウトリーチ担当者会議 (CEOCSM)¹」に先駆けて実施されたアンケート調査「2010年 音楽大学および音楽院における教育並びにコミュニティアウトリーチプログラムに関する調査 (2010 Survey of Educational and Community Outreach Programs at Conservatories and Schools of Music)」の結果について、分析と考察を試みるものである。これを通して、3大学連携プロジェクトに有益な示唆が得られるものと期待される。

上記アンケート調査は米国・英国・日本の計16校の音楽大学ないし音楽院に対して行われ、その内訳は米国12校、英国1校、日本3校である²。海外の動向を分析するため、本稿では日本の3校を除くこととする。また、英国の王立ノーザン音楽大学が実施しているMusic for Healthプログラムについては、他の15校が実施する教育並びにコミュニティアウトリーチプログラム（以下、アウトリーチプログラム）とやや方向性が異なる。そのため本稿においては米国の音楽大学および音楽院12校が実施しているアウトリーチプログラムに関し分析を行い、米国の傾向について考察したい。

1. 各校の実施体制

アウトリーチプログラムの担当部署は、音楽学部には包括されるのみならず、アウトリーチ部門、キャリア担当部門、室内楽部門等、細分化した部署に位置づけている大学が見られる（表1を参照）。他方、ピーボディ音楽院では学生課に所属となっている。

職員構成は常勤あるいは非常勤のディレクターないしコーディネーター、助手、学生スタッフ、ボランティア等で構成されている。一部の大学でインターンやワークスタディを含んでいることが特徴的である。

参加学生数は、10人程度から200人まで、大学により大きく異なっている。学部学生数に対し、大学院生数の方が多い大学が見受けられる。

学生の参加形態は、ボランティア、有給、単位取得の各種形態がある。「有給で参加する学生がいる」大学が多い結果となっていることは、米国の大学の特徴を示しており、フェローシップ等の助成プログラムを設けていることと関係すると見られる。例えば、ジュリアード音楽院が学生に9つのティーチングあるいはパフォーマンスのフェローシップを設けている点で注目される。

2. プログラムの内容

表1から各校は地域の幅広い対象者に向けて様々な音楽プログラムを実施し、学生による指導や演奏を行っていることが理解できる。

プログラムの履修はカーチス音楽院、イーストマン音楽学校、マンハッタン音楽院、サンディエゴ州立大学等で必修である。カーチス音楽院およびマンハッタン音楽院では、学年や専攻により必修とされている。各校において必ずしも学生の必修科目として位置づけ

¹ 本会議へは、3大学連携プロジェクトより小島レイリ（東京音楽大学連携コーディネーター）、津上智実（神戸女学院大学教授）、武藤京子（昭和音楽大学准教授）の3名が参加した。詳細は15～22ページを参照のこと。

² 調査対象校は次の16校である。カーチス音楽院（米国）、イーストマン音楽学校（米国）、ジュリアード音楽院（米国）、神戸女学院大学音楽学部（日本）、マンハッタン音楽院（米国）、ニューイングランド音楽院（米国）、ピーボディ音楽院（米国）、王立ノーザン音楽大学（英国）、サンディエゴ州立大学（米国）、昭和音楽大学（日本）、東京音楽大学（日本）、タフツ大学（米国）、イリノイ大学（米国）、ノースカロライナ大学芸術学部（米国）、南カリフォルニア大学ソーントン音楽学校（米国）、イェール大学音楽学部（米国）

られているわけではないようである。

外部からの教育資源の利用では、ゲストスピーカーを挙げている学校が多い。コミュニティの様々な場面で活動するためには、大学の教員のみならず、学生を指導する人材が幅広く求められていると考えられる。

プログラムと卒業生との関わりでは、多くの大学で授業への協力やスタッフ・指導者として卒業生が参画している。卒業生が学生のキャリア開発に指導的役割を果たすなど、アウトリーチ活動とキャリア教育の接点を読み取ることができる。

3. 地域との関わり

アウトリーチプログラムは地域の学校で実施しているケースが12校中9校（75%）と最も多い（図1を参照）。特に、イーストマン音楽学校、ノースカロライナ大学芸術学部、イエール大学音楽学部で公立のK-12 schools（幼稚園から高校にかけての教育課程）を対象としており、注目される。

次いで老人ホームが多く、病院や各種の福祉施設で幅広く活動を行っている。日本では学生のアウトリーチ活動としてはあまり行われていないと思われるホームレス宿泊所等シリアスな場所にまで出張していることは特筆される。コミュニティとの深い結びつきを意識している事がうかがわれる。

表2によると、プログラムの形態はパフォーマンス、コンサート、マスタークラス、ワークショップ、個人レッスン、相互交流などが挙げられており、様々な形態が可能であることが理解できる。プログラム実施回数は学校により数に大きな開きがある。

4. 資金繰りの工夫

各校の資金源を見ると、アウトリーチプログラムは外部から様々な寄付を受けている。ノースカロライナ大学芸術学部のように、一部州からの助成も行われていると見られる。また、タフツ大学では卒業生が書籍や楽器を寄贈しているとされる。

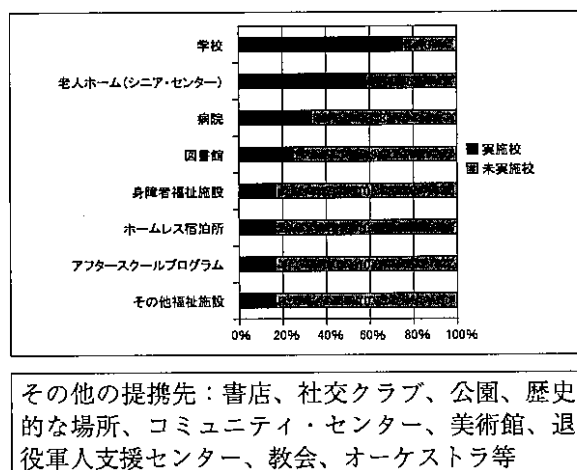
支出はスタッフ等の人件費が大きな割合を占める。先に述べたように、フェローシップ等助成プログラムの実施と関連して、ニューヨーク音楽院やタフツ大学で奨学金の支給のための支出がある³。

5. プログラムの成果

プログラムの成果としては、教育プログラムとしての発展と深化や、参加する学生数の増加が挙げられている。サンディエゴ州立大学では地域で初めて学生演奏家の契約業務を行ったことを成果として主張している。

また、長期的な効果への言及や、「若い感性に作用し、芸術が教育における不可欠な資源であることを示している」と述べている大学もある。

図1 主な提携先別実施校の割合



出典：「音楽大学および音楽院における教育並びにコミュニティアウトリーチプログラムに関する調査」をもとに筆者作成

³ 本アンケート調査においてフェローシップを実施していると回答したジュリアード音楽院は、資金面に関しては回答していない。

今後の課題としては、アウトリーチプログラムのみならず他の学業も抱える学生の予定の調整等、スケジューリングおよび資金の調達が多くで大学で指摘されている。ボランティアの促進といった課題も見受けられる。また、学生がようやく十分に能力が付いた時点で卒業してしまうといった持続性の問題などがコメントされている。カーチス音楽院では、大学の新しい指導方針のもとにプログラムをどのように再定義すべきかといった位置づけの問題も提起されている。

将来の計画としては、卒業生の協力を促進することや、キャリア・サービス・オフィスと連動して活動を続けていくことが挙げられている。学生がアウトリーチプログラムで培った能力を卒業後の活動に活かしていく体制を整えることがプログラムの展望として浮かび上がるといえる。

本アンケート調査の最後で、各校がCEOCSMをどのように活用していきたいかを述べている。年間を通じて大学間でのコミュニケーションを一層密にすることにより、傾向や問題点等を共有していきたいことや、学生が交流する機会を設けたいこと、ファンディング(資金調達)やスタッフイング(職員配置)に関するアイデアを得たいとの期待が寄せられている。

6. まとめ 一米国におけるアウトリーチプログラムと「音楽コミュニケーション・リーダー」

米国におけるアウトリーチプログラムが、各種学校、特にK-12 schools等公立学校において音楽の生徒を対象として実施されている例があることは、米国の音楽教育事情と関連した特徴と見られる。すなわち、米国の公立学校で音楽教育が不足している実情を踏まえると、若い世代が音楽教育を受ける機会として、アウトリーチプログラムが一定の役割を果たしていると考えることができよう。

プログラムにおいて卒業生はスタッフや指導的役割として、プログラムへの協力が欠かせない存在であり、卒業生との関わりを促進することは重要な課題と見られる。

学生の卒業後の活動との関連では、アウトリーチプログラムで得た体験や技術が音楽家のキャリアを広げることに結びつくよう、キャリア・サービス部門との一体化の方向にあることが見受けられる。

以上、米国におけるアウトリーチプログラムの分析から、3大学連携プロジェクトが目標とする「音楽コミュニケーション・リーダー」の役割は、地域において幅広い場面で人々が音楽に触れる機会を作り出すことであり、特に若い世代を対象に音楽教育の一環として機能するものであると考えられる。一方在学中のアウトリーチの体験が、卒業後に音楽家として活動の幅を広げることの一助となるように、音楽大学においてアウトリーチプログラムを組織的に位置づけることが、今後の課題となるであろう。

各校のCEOCSMへの期待を見ると、大学間のコミュニケーションや学生の交流が強く希求されている。これは3大学連携プロジェクトの目的と合致するものであり、その意味で本プロジェクトが日本のみならず米国との比較においても先進的な取り組みであることが理解できる。「音楽コミュニケーション・リーダー」の養成に向けて、学生の指導体制・指導方法等、さらに具体的な調査研究が求められよう。

(佐藤良子)

2010 Survey of Educational and Community Outreach Programs at Conservatories and Schools of Music

表1. 各校におけるプログラムの実施体制と内容

学校名および プログラムの担当部署	職員構成 (学生スタッフ・ボランティア含む)	参加学生数	学生の参加の実態
1. Curtis Institute of Music Philadelphia, PA/Career Studied Faculty Department	非常勤ディレクター (20時間/週) 1名、 学生スタッフ2名	学部生 40-45名、 大学院生 2-3名	有給の人もあり、 授業の単位を受け る人もあり。
2. Eastman School of Music Rochester, NY/Chamber Music Department	コーディネーター1名、TA (教育助手) 1名、 インターン (プログラム助手) 1名	学部生 150-180名、 大学院生 50名	授業の単位として 構成する必要あり。
3. The Juilliard School New York, NY/Department of Educational Outreach	ディレクター、アソシエイト・ディレクター、 プログラム助手、 運営助手	回答なし	回答なし
4. Manhattan School of Music New York, NY/Outreach Department	常勤プログラムディレクター1名、 博士課程研究員3名、全40時間	学部生 75名、 大学院生 100名	有給の人もあり、 授業の単位を受け る人もあり。
5. New England Conservatory Boston, MA/College Division	常勤ディレクター1名、 常勤プログラム・マネージャー1名、 プログラム・コーディネーター0.5名、 学生スタッフ (場合により、ワークスタディの学生)	学部生 100名、 大学院生 100名、 その他 (教授のプログラ ムに登録している25 名)	20% がボラン ティア、70% が 有給、10% が単 位取得目的。
6. Peabody Conservatory Baltimore, MD/Student Affairs Dept.	非常勤ディレクター1名、 学生スタッフ6名 ("Site Coordinators" : ボランティアとともに アウトリーチコンサートをコーディネートする [現場コーディネーター])、 およそ50-100人の学生演奏ボランティア	学部生 150名、 大学院生 100名	ボランティア
7. San Diego State University San Diego, CA/School of Music and Dance	地域や外部に派遣するために学生演奏家を雇用する契約を行う教 職員1名。この教職員のメンバーはコミュニティアウトリーチに おける講座や演奏家のビジネス訓練の講師も務めている。	学部生 50名、 大学院生 20名	有給および授業単位
8. Tufts University Medford, MA/Music Department	コミュニティ・ミュージック (プログラム) ディレクター1名、 必要な際に音楽学部事務室からの支援やイベントスタッフ有り。 インストラクター18名 (うち、4名はTuftsの学部学生)。 授業の助手および毎週土曜日の準備の手伝いとして7名の学生。 父兄ボランティア1名。	学部生 11名	有給
9. University of Illinois Champaign, IL/Outreach and Public Engagement Department	アウトリーチ・ディレクター1名 (兼務)、 50%プログラム・コーディネーター2名。 25%卒業生助手2名 (授業期間中12時間/週)。 イベントによりボランティアを編成。夏期研修では100名以上 が講座やレッスンの講師として雇用される。	学部生、大学院生、その 他様々	ボランティア、有 給、学外体験
10. University of North Carolina School of the Arts /Office of Academic Programs	常勤プログラムディレクター1名	学部生 150-200名、 大学院生 10-15名、 その他 (高校生 10-20 名)	ボランティアおよ び有給
11. USC Thornton School of Music Los Angeles, CA/Outreach Department	ディレクター1名 (60%)、プログラム・マネージャー1名 (70%)。 ワークスタディの学生3名 (全35時間/週)。 現場あるいはプログラム・コーディネーター3名 (全10時間/週)。 ティーチングもしくはパフォーマンスのための学生枠80-90名。	学部生 40名、 大学院生 45名	ほとんどが少額の 有給、ボランティ アの者もあり。
12. Yale School of Music New Haven, CT/School of Music	ディレクター2名 (うち1名は副学部長)。 コミュニティ・プログラムの学生スタッフ並びにボランティアの マネージャー2名。 Yale Class of 1957のメンバーの多くがプログラムの議論に参加している。	学部生 18名、 大学院生 62名、 その他 (プログラムへの 応募者272名)	ボランティアおよ び有給

プログラムに関する簡単な説明	アウトリーチ、座および トレーニングプログラムの 目的について	学校からの 教員等の利用	プログラムと 卒業生との関わり
エンゲージメントプログラムは学生たち（ほとんどは学部学生）に地域での様々なアウトリーチ活動に参加するための訓練を行うとともに、その機会を与えることに焦点を当てている。	第2学年の学生はFoundations of Engagement講座が必修（2単位/年）	有り。ゲストスピーカー	有り。卒業生は授業で話し、必要な協力をする。
Music for Allは室内楽クラスを履修する学生全員に必要とされるプログラムである。学生たちは2つのアウトリーチコンサートを行うことが求められる一ひとは小中学生向け、もうひとはより幅広い聴衆向けである。	Sharing the Magic of Music講座は毎秋学期に開かれる。	有り。ゲストスピーカー	有り。通常卒業生の室内楽グループ1団体が授業に訪れる。
ジュリアードの学生のために9つのティーチングないしパフォーマンスのフェローシップを継続している。また、音楽教育を受けていない8-14歳の生徒のための土曜日の音楽指導プログラムを実施している。	回答なし	回答なし	回答なし
MSMの175名の学生が学校、託児所、病院、その他地域で様々な聴衆を対象に指導や演奏を行っている。	アウトリーチクラスはオーケストラパフォーマンス・プログラム（大学院）の1年生、ジャズ専攻のMaster of Music（音楽修士）1年生、および大学院のOpera Studioに在籍する学生の必修	有り。ゲストスピーカー	有り。卒業生はキャリアパネリストを務める。
NECの学生とボストン周辺地域を結ぶため、また21世紀における音楽のキャリアに必要な演奏とティーチングのスキルを学生に提供するため、2003年に創設。演奏家と聴衆の相互作用に焦点を当て、学生がすべての世代の聴衆と効果的にコミュニケーションできるようにするプログラム。NECの学生は125の提携組織とのパートナーシップのもと、年間およそ350の事業に参加している。	必修ではない。室内楽のグループが参加できるセミナークラス、年間を通じたワークショップ、助言および訓練を継続的に実施している。	有り。ゲストエデュケーターないしゲストスピーカーによるワークショップ	有り。特別ワークショップあるいは卒業生特別プロジェクトを実施する。
ボランティア演奏家との協働により、良質の音楽を体験することができない聴衆に届けることをミッションとしている。本プログラムは学生が主体的に管理するが、運営上限定的な条件も機能している。アウトリーチ活動は原則としてボランティアで行う。訓練された学生による「現場コーディネーター」は学生ボランティアやボルティモア周辺地域の団体との最初の窓口となる。	毎年秋に一週間のトレーニングセミナーを開催している。コーディネーターは参加が必要で、ボランティアも奨励される。	有り。コミュニティの様々な分野からのゲストスピーカー	有り。40 から 50 名の卒業生が通常ボランティアとして関わっている。
SDSU Adams' Projectはコミュニティおよびその外の社会で演奏と指導による価値ある体験を増やし、出演に対する報酬で生計を立てるプロフェッショナルレベルの学生演奏家のための契約業務を行っている。Heartpower Performancesはとりわけ危機的状況にある人々、例えばホームレス、退役軍人、非行少年等を対象とした事業である。	Practicum in Community Outreach コースは必修である。	有り。ゲストスピーカー	有り。現在20名の卒業生が関わっている。
3歳から18歳までの子どもや青少年のための土曜音楽クラスでは、音楽と動き、ピアノ、録音機器、ヴァイオリン、歌、フルート、アフリカン・ドラム、室内楽、ドラムセット、ギター、アカペラ、ジャズと即興、および理論が含まれる。平日夜のクラス及び室内楽のワークショップは大人を対象としている。Special Sundays at Tufts Community Concertシリーズはアーティストや音楽ジャンルにより、様々な内容で行われる。また土曜日に家族と子どもたちのコンサートも行われる。2010年はサマーコミュニティミュージックキャンプが拡大される。	学生はレッスンないし授業のアシスタントとしてインストラクターによって訓練される。	なし	有り。現在2名の卒業生がプログラムで教えている。
アウトリーチ・地域連携オフィスはおよそ20のプログラムを提供している。ピアノ実習プログラムがひとつのプログラムとして通年で行われる。ほとんどが一日限りのイベントである。サマープログラムは全部で23の個々の「キャンプ」で1-3週間のセッションを構成し、1000人以上の学生が参加する。	なし	なし	有り。有給の参加およびマスタークラスの指導者として関わっている。
アウトリーチオフィスは、UNCSA オフィス (Applause Officeとして知られる) の管理、コミュニティのアウトリーチや約40のコミュニティ巡回演奏のコーディネート、UNCSAの学内アウトリーチプログラムと同校のアウトリーチカレンダーのコーディネート、UNCSA Advocacy Task Forceとの会合を行っている。	キャリアないしアウトリーチを扱う2つの講座が開講されており、キャリアサービスに結びつくワークショップが行われる。	有り。Public speaking coachがアウトリーチパフォーマンスとともに働く。	有り。スタッフ、トレーナー、巡回演奏の引率者として関わっている卒業生がいる。
アウトリーチプログラムは地域の学校における音楽プログラムを支援するために計画されており、それが十分ではない地域の学生たちに音楽指導を提供している。毎週の音楽指導と特別演奏あるいは単発の機会を我々の地域のコミュニティの学生およびその家族に提供している。プログラムのすべての側面、同大学の学生は教師、演奏家、運営担当者、録音技術者として仕事をする。	すべての参加者にトレーニングセッションが必修である。	有り。数名のゲストスピーカー、ほとんどが学内の教職員	現在はずかだが、卒業生の参加を拡大していくことを計画。
寄付により、New Haven Public School Music Programや、全国的な公立学校音楽教師のためのピエンナーレ・シンポジウム、公立学校における音楽教育に関し専門の招聘教授を任命しての訓練、調査、評価および著名な音楽学校との関係づくりといった、公立学校の音楽教育の改良を目指す様々な活動を支援している。	セミナーは一对一の指導と同様に実施される。	有り。ゲストスピーカー	有り。50名の卒業生が様々なプログラムで働いている。

注) 佐藤記

2010 Survey of Educational and Community Outreach Programs at Conservatories and Schools of Music
表2. 地域との関わり

	学校名	プログラムの提携先・対象者等	プログラムの形態	プログラム実施回数	その他 共同的なコミュニティ ないし芸術組織
1	Curtis Institute of Music Philadelphia, PA	pre-K（未就学児童）から成人までを対象とするエデュケーション・プログラム、医療施設、その他芸術組織	主にアウトリーチで出演する。コーチングおよびマスタークラスではパネルの使用や会話を含むことがある。	60-70	全地域の様々なコミュニティパートナー
2	Eastman School of Music Rochester, NY	K-12各種（公立、私立、教区）学校、シニア・ホーム、図書館、書店、社交クラブ、専門学校・大学等	コンサートとプレゼンテーション（口頭発表）	80-100	ロチェスターの若い聴衆、ロチェスター・フィルハーモニック・オーケストラ
3	The Juilliard School New York, NY	回答なし	回答なし	回答なし	回答なし
4	Manhattan School of Music New York, NY	計30の提携先：学校、老人ホーム、公園、病院、身障者リハビリセンター、シニア・デイ・センター等	学校が提携先の場合は、楽器の授業と演奏。コミュニティが提携の場合は、演奏とドラムサークル。	500	Teachers College Columbia University
5	New England Conservatory Boston, MA	125の提携先：学校（幼稚園から大学まで）、放課後プログラムや青少年プログラム、シニア・センター、ホームレス宿泊所、病院、図書館、歴史的な場所、コミュニティ・センター、美術館等。	双方向パフォーマンス、マスタークラス、ワークショップ、滞在型、集合型、一対一のレッスン。毎年提携先で絶えず変化し多様性を備えている。	350	大学生等高学歴者、地域の若い聴衆、Healing Arts for Kids、ボストン・シンフォニー・オーケストラ、From The Top、Virginia Arts Festival、室内楽組織
6	Peabody Conservatory Baltimore, MD	病院、ホスピス、公立学校、シニア・センター、身障者リハビリ施設、薬物乱用更正施設、ホームレス宿泊所、アフタースクールプログラム	パフォーマンス、音楽的カタルシスによる空気の变化、魅力ある参加型の音楽的セッション	100-120	ボルティモア芸術学校、ボルティモア・シンフォニー
7	San Diego State University San Diego, CA	図書館、公立学校、大学、退役軍人支援センター、家庭内暴力保護組織、各種教育現場、児童相談所、シニア・センター	演奏と授業	200	各種団体
8	Tufts University Medford, MA	近郊の公立学校および老人ホーム	公立学校での音楽の生徒のための指導、子供たちのコンサート、老人ホームでの演奏	20	近郊の芸術組織との会合の過程における協働
9	University of Illinois Champaign, IL	Champaign-Urbana交響楽団：Young People's concertのためのSchool of Musicの提携団体	回答なし	20以上	回答なし
10	University of North Carolina School of the Arts	教会、コミュニティ・カレッジ、アート・ギャラリー、老人ホーム、K-12学校、子どもや成人の病院患者およびスタッフ	コンサート、ワークショップ、病院の患者との相互交流	100	回答なし
11	USC Thornton School of Music Los Angeles, CA	大学の指定地区内の学校	週ごとの授業、個人レッスン、学内コンサート、マスタークラス、「ドラムデイ」、課外出張、「Opera Inside and Out」	1078のレッスン、一回ずつ46	各種団体
12	Yale School of Music New Haven, CT	主としてK-12公立学校生徒	音楽教養プログラム	60	地方オーケストラ、公立学校および大学

注) 佐藤訳

2-2 音楽キャリア開発担当部署の活動実態についての調査

音楽系3大学連携による共同プロジェクト「音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて」においては、教育並びにコミュニティアウトリーチ活動とともに、音楽キャリア開発が重要な要素となっている。そこで本稿では、2010年1月12日・13日の両日に開催された「音楽キャリア開発担当者連絡会（NETMCDO）ニューヨーク総会¹」の際に配布された調査資料（音楽キャリア開発担当部署の活動実態についてのアンケート調査）をもとに、米国を中心とする諸外国の大学における音楽キャリア・サービスの取り組みについて報告する。

調査の対象は、大学が米国29校、オーストラリア1校、カナダ1校、英国1校、日本3校、その他の関係機関が3機関である²。調査対象校の中には音楽の単科大学から、音楽学部のほかに複数の学部を持つ総合大学までが含まれている。このうち、本稿では日本の大学及びその他の関係機関を除く計32校について、取り上げることとする。

調査は各校の担当者に対するアンケート形式で実施された。本稿で扱う調査結果は、以下の6項目である。

- 1) 各大学の学生数（学部生、大学院生等）
- 2) キャリア・サービスのために配置している職員の体制
- 3) 各大学が提供している音楽キャリア・サービス

¹ 本会議へは、3大学連携プロジェクトより小島レイリ（東京音楽大学連携コーディネーター）、津上智実（神戸女学院大学教授）、武蔵京子（昭和音楽大学准教授）の3名が参加した。詳細は11～14ページを参照のこと。

² 対象校は、表1に挙げた32校及び、日本から神戸女学院大学音楽学部、昭和音楽大学、東京音楽大学の3校と、アストラル・アーティストズ（Astral Artists）、ホーンズ国際ピアノコンクール（Honens International Piano Competition）、オクターヴ・パフォーマンス・アーツ（Octave Performing Arts）の3機関である。

- 4) キャリアプログラムあるいはサービスで最も誇りとする事
- 5) キャリアの準備に際し最も難しい問題
- 6) 音楽キャリア開発分野において現在最も重要な問題

以上の項目のうち、1) 各大学の学生数及び2) 職員の体制については回答を表に取りまとめた（表1を参照）。また、3) 各大学が音楽キャリア・サービスで提供しているものは、サービスの種類別に実施校数の割合をグラフに示した（図1を参照）。

これらの表及びグラフに加え、その他の項目については各校の記述回答をもとに、次節以降に諸外国の大学における音楽キャリア・サービスの実態と課題について考察したい。

1. 学生数及び職員の体制

表1のA. 学生数を見ると、各校により大きく異なっている。これは先に述べたように、単科大学から総合大学までが含まれるため、各校の規模が異なることや、大学院生等に関してはMM（Master of Music：音楽修士）、DMA（Doctor of Musical Arts：音楽博士）、Artist Diplomaなど様々な課程の在籍者を含んでいるためであることが理解できる。

表1のB. 職員の体制はチャールストン大学、カーティン工科大学、ウィスコンシン大学マディソン校音楽学部の3校を除く全ての大学でキャリア開発担当職員を置いている。特に5名以上の常勤職員を置く大学は5校が数えられる。例えばマギル大学³は、7名のキャリアアドバイザー及び6名の運営スタッフ等を常勤で任用しているが、総合大学であることから、その組織体制は全学的なキャリ

³ <http://www.mcgill.ca/caps>を参照。

アセンダー機能のもと、各学部キャリア担当オフィスを設け、担当アドバイザーを配置している。

常勤職員を置いていない大学でも、複数のパートタイム職員や学生アシスタントを任用している。パートタイム職員には、非常勤職員あるいは他の部署の常勤教職員等が一部キャリア業務を兼任で担当しているケースも見られる。

一方、一週間あたりの学生の労働時間を見ると、学生アシスタントが果たす役割は少ないものと推測される。

2. 提供している音楽キャリア・サービス

音楽キャリア・サービスとして多くの大学が提供しているものには、個人的なキャリアカウンセリング、コンクール情報や音楽祭等情報案内、キャリアワークショップ、求人リストのデータベースや、夏期・短期求人リスト作成などが挙げられる（図1を参照）。

キャリアワークショップの実施回数の多い大学はロヨラ大学（1年につき40回）、マネス音楽院（同20回）、マギル大学（同25回以上）、ニューイングランド音楽院（同30回）となっており、職員数との相関を見ると、おおよそ配置されている職員数の多い大学ではキャリアワークショップの実施回数が多いと

いうことができよう。

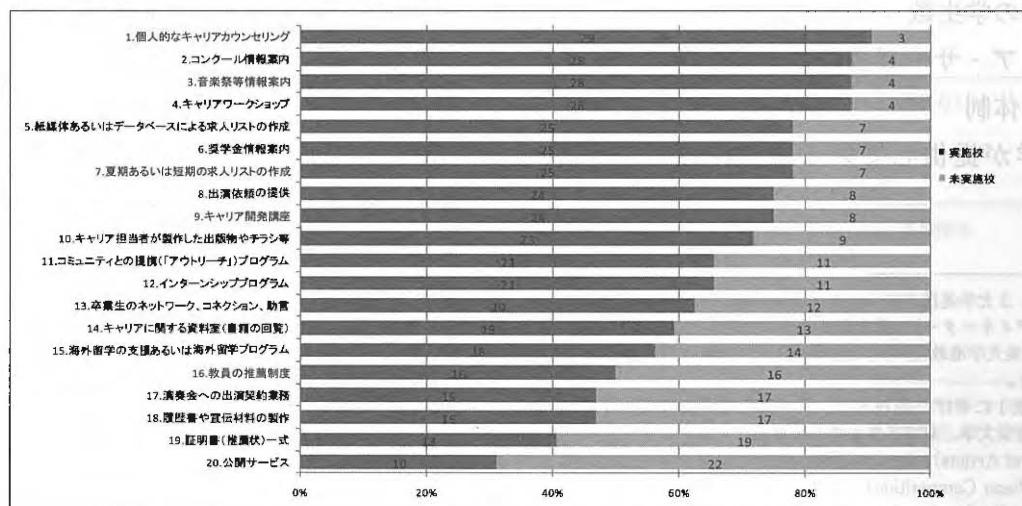
一方、出演契約業務、推薦状や履歴書等の作成、教員による推薦制度等、就職あるいは仕事を得る機会に結びつく実質的なサービスを提供している大学は半数以下にとどまっている。

3. キャリア・サービスで最も誇りとする事

本アンケート調査の回答では、各大学が特色あるキャリア講座を開設していることや、卒業生とのネットワークをはじめ音楽キャリア情報オンラインデータベースなど、様々な独自のキャリア・サービスを行っていることが記述されている。

例えばジュリアード音楽院ではProfessional Artist Servicesを挙げているが、これは様々な「特別な」機会、すなわち結婚式や記念日等の要請に応じて学外の商業的な場で学生や卒業生を出演させるというものである。この取り組みが、在学中の学生と卒業生のネットワーク作りや、演奏を通じてNew York Tri-state地区を結ぶ機会となっており、音楽の技術からプロとしての作法である社会的なスキルまでが求められるため、学生の大きな成長が見られると紹介されている。このようないわゆるアウトリーチ活動に類する取り組みは複数の大学が誇るものとして挙げているこ

図1 音楽キャリア・サービス種類別実施校



出典：「音楽キャリア開発担当部署の活動実態についてのアンケート調査」をもとに、早川作成

とから、効果的なキャリア・サービスと認識されていることが理解できよう。

4. キャリアの準備に際しての問題

各大学の回答をまとめると、学生の姿勢に関して積極性の欠如や基本的なコミュニケーションスキルの不足が挙げられている。

実施体制を整えるにあたっては、学生の多忙や資金不足など、具体的な制約があることが浮かび上がる。様々な情報を集約し供給する仕組み作りを課題としている大学もある。

学生が入学後、早期にキャリア開発教育を始めることが必要との指摘がある一方で、キャリアの準備のためには、そもそも教員や学生の理解が不足していることも問題となっている。

5. 音楽キャリア開発分野における課題

音楽キャリア開発分野における現在の重要な課題としては、まず、キャリア・サービスへの卒業生の参加の促進を課題としている大学がある。

調査対象校の中では、音楽キャリア開発の取り組みは15年を数えている大学もあるが、学生や教員の意識改革が課題とされているように、キャリア開発に対する学内での理解や位置づけは未だ十分ではないと思われる。さらに、「厳しさを増す経済情勢の中で、自分自身でキャリアを作り上げていくこと」「演奏家に経営感覚を持った人として市場を開拓することを学ぼう奨励すること」という記述があるように、音楽家自身が積極的に活動の場を開拓し、考え方を変えていくことが求められていることを示している。そのため、多くの大学の回答で「起業家的発想」の必要性に触れている。

一方で「音楽家の持続的な発達を助けること及び彼ら個人の価値や情熱を反映したキャリアを充実させる」「ビジネスの常識を発展させる一方、音楽家精神を研ぎ続けること」

「音楽家は音楽的なスキルで生活の糧を得るための機会を探す際に創造性を用いるべき」とされ、音楽家が固有に持つ精神や創造性、音楽的なスキルをキャリア開発に活かす必要がある。

音楽キャリア開発をサポートする立場としては「音楽のキャリア開発のプロは新しい技術やデジタル資源に寄り添い、音楽家の自主独立を可能にしなければならない」という記述から、科学技術の進歩に対応しながら、音楽家の自立的な活動の場を開拓していく必要に言及していると解される。

さらに、変化する市場や聴衆を理解し新たに開拓することが指摘されており、社会の動向に敏感であることはキャリア開発分野に不可欠であるといえよう。

6. 結びに

本稿では諸外国の大学における音楽キャリア開発の取り組みを見てきたが、その特徴のひとつに卒業生との密接な関わりを重視していることが挙げられる。卒業生の活動が在学生にとって身近で具体的な参考となるため、キャリア・サービスとしてはその情報の収集と提供、実際に卒業生から助言を受ける機会を作るべく、卒業生とのネットワーク作りや様々な取り組みを行う必要がある。また、キャリア開発部門の役割としては、卒業後のフォローアップも含んでいる。

急速に変化する社会を背景に、柔軟で創造的にキャリアを開発していくという意味で音楽家及び音楽キャリア開発に携わる者が「起業家的」であることが求められているといえよう。調査結果の分析から、音楽家側はこれまでの「箱」から外に出ていく意識を持つこと、そのために積極的に取り組む姿勢がキャリア開発につながるということが、基本的な方向性として改めて認識された。

(佐藤良子、グラフ作成：早川まこと)

音楽キャリア開発担当部署の活動実態についてのアンケート調査

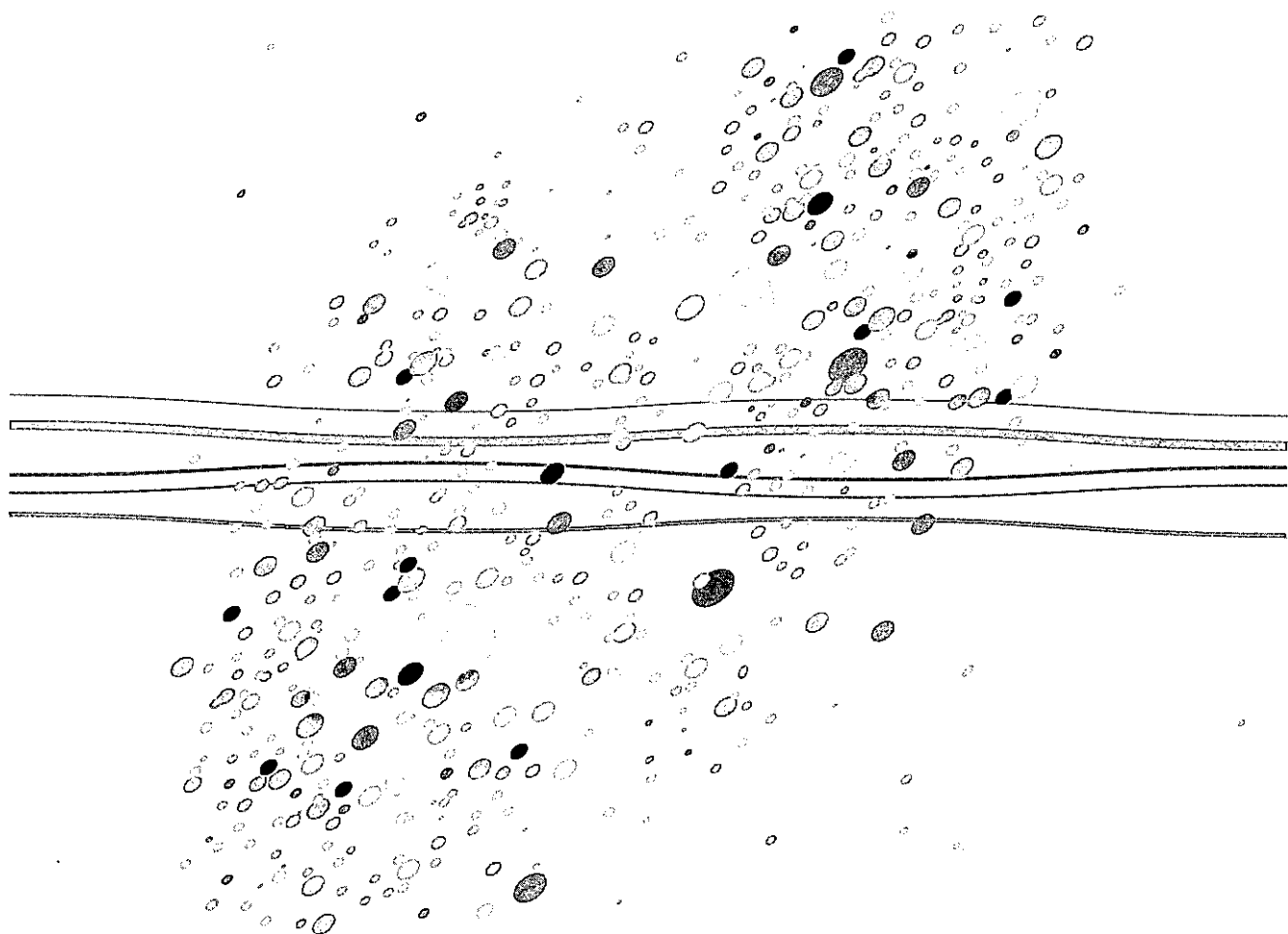
表1. 学生数及び職員の体制

	大学名 (132校)	A. 学生数			B. 体制			
		a) 学部生	b) 大学院生	備考	c) 総数	d) パートタイム	e) 学生助手	f) 専任の教員
1	Azusa Pacific University	210	65		1			
2	Berklee College of Music	4,000			2~3		5	42
3	Boston Conservatory	210	147		1		1	4
4	Cleveland Institute of Music	253	204			1 (副学生部長の 業務の一部)		
5	The Colburn Conservatory	67	49		1	1		
6	College of Charleston	77			該当なし			
7	Curtin University, Australia	回答なし			回答なし			
8	Curtis Institute of Music	160				2 (出演コーディネーターを含む)	2	10~12
9	Duquesne University	300	100			3 (その他の責任者あり)	3	10~15
10	Eastman School of Music/ University of Rochester	519	395			4	7	20
11	Juilliard	334	344		3		4~5	30~40
12	Loyola University New Orleans	480	19		5		6	各10
13	Manhattan School of Music	392	538 (DMA, P/T, Professional Studio, Artist Diplomaを含む)		1		1	7
14	Mannes College The New School for Music and The New School for Jazz and Contemporary Music	472	174 (Mannes Collegeのみ)	Mannes CollegeとThe New Schoolの協力体制	4 (キャリアセンター) 2 (教員)		3 (キャリアセンター)	30
15	McGill University, Montreal, Canada	860	420		7 (キャリア アドバイザー) 6 (運営スタッフ、ティ レクター、キャリア・ コンサルタントを含む)		5	60~70
16	Millar College of the Bible					1	2	8
17	New England Conservatory	395	361 (MM, DMA, Artist Diploma)		2		4	40
18	Oklahoma Baptist University	100			1			
19	Rice University, Shepherd School of Music	120	150	他、MM (修士): 150、 DMA (博士): 30		1		
20	Royal College of Music, UK	400	200		6	3	1	4
21	St. Bonaventure University	10			1	1		
22	San Diego State University School of Music and Dance	250	50			1		
23	San Francisco Conservatory of Music	207	208		業務を多数の職員で分担			
24	The University of the Arts	281	32		1		1	9
25	University of Colorado at Boulder	おおよそ500			1		1	15
26	University of Denver, Lamont School of Music	おおよそ 250	75			1		
27	University of North Carolina School of the Arts	127	47	他、Drama majors (HS and college): 133 Filmmaking majors (学部生、大学院生): 278 Design and Production majors (学部生、大学院生): 242	2		2	10
28	University of North Texas, College of Music	1,080	570		4			
29	University of South Carolina	400	100			2		
30	University of Southern California Thornton School of Music	500	400			2	2	20
31	University of Wisconsin- Madison School of Music	225	200		回答なし			
32	University of Wisconsin Oshkosh	100 (音楽および音楽 教育専攻)			6	4	10	

出典: 「音楽キャリア開発担当部署の活動実態についてのアンケート調査」をもとに、早川・佐藤作成

3.「ミュージック・コミュニケーション 講座」の効果測定に関する研究

平成22年度3大学共通科目新設に向けて：中間報告



1. 効果測定の目的

音楽系3大学連携による共同プロジェクトでは、平成22年度より共通科目「ミュージック・コミュニケーション講座」（以下、MC講座）の新規開設を予定している。MC講座では音楽に関連する幅広い分野から講師を招聘し、インターネット・ビデオ会議システムの活用による3大学同時受講及び合同夏期セミナーを実施することとなっている。これにあたり、講座を受講した学生の成長の様子を把握し、本プロジェクトの構想の評価及び今後の講座の改善につなげることを目的とする、MC講座効果測定の実施に向けて、平成21年度はその手法の検討を行った。

本稿では、検討の過程及び結果について報告する。

2. 検討の方法と手順

効果測定の手法の検討にあたり、下記の参考文献を主な基礎資料とした。

- ・佐藤 純著、財団法人社会経済生産性本部編『コンピテンシー・ディクショナリー—各社事例にみる評価と活用—』東京：生産性労働情報センター、2006年。
- ・SPENCER, Lyle M. and SPENCER, Signe M., *COMPETENCE AT WORK* 1993, Jhon Wiley & Sons, Inc.
(邦訳：梅津祐良・成田攻・横山哲夫訳『コンピテンシー・マネジメントの展開』東京：生産性出版、2001年。)
- ・鈴木敏恵編著『ポートフォリオで進路革命！—就職&進学成功・インターンシップ・評価指標—』東京：学事出版、2002年。
- ・心理教材開発研究会編『自分発見検査キャリアスタート』東京：実務教育出版

- ・難波美都里「大学連携で取り組む実践力のある地域人材の育成および輩出～大学連携キャリア教育センターの挑戦～」社団法人私立大学情報教育協会『大学教育と情報』2009年度 Vol.18 No.1（通巻126号）
http://www.juce.jp/LINK/journal/0903/02_03.html（2010年2月25日確認）
- ・特定非営利活動法人南大阪地域大学コンソーシアム『平成19年度地域自律・民間活用型キャリア教育事業（ものづくりのまち堺から発信する「こんなモノ欲しかったん!」）報告書』
- ・戦略的大学連携取組事務局編集・制作『文部科学省 平成20年度戦略的大学連携支援事業 実践力のある地域人材の輩出～大学連携キャリアセンターを核にして～平成20年度報告書』大阪：桃山学院大学、2009年。
- ・『平成17年度～19年度 経済産業省「地域自律・民間活用型キャリア教育事業」キャリア教育プロジェクト研究会報告書』大阪：特定非営利活動法人南大阪地域大学コンソーシアム

検討の手順は、まず本プロジェクトに先立ち大学連携を行っている、南大阪地域大学コンソーシアムの事例に関する資料を参照した。一方測定する内容、すなわち指標とする能力の定義にあたっては、企業経営における人材マネジメントに活用される理論である、コンピテンシーに関する文献を参照した。また、わが国の大学教育において近年課題とされているキャリア教育に関する文献を参照した。

以上の資料による文献調査をもとに、効果測定の手法を検討し、調査シートの作成を

行った。調査シートの作成にあたっては、田代康子氏（昭和音楽大学教授・教育心理学）のご協力を賜るとともに、本プロジェクト関係者による数度の会議を経て、MC講座の趣旨に沿った設問を独自に考案した。

3. 効果測定の手法及び内容の検討

1) 南大阪地域大学コンソーシアムにおける「キャリア教育効果測定システム」

特定非営利活動法人南大阪地域大学コンソーシアム（以下、南コンソ）の取り組み事例は、大学連携の先行事例と位置づけることができる。南コンソでは平成17年度から19年度にかけて経済産業省委託事業「地域自律・民間活用型キャリア教育」としてキャリア教育プログラムの開発と実践を行い、その成果をもとに新たに文部科学省平成20年度戦略的大学連携支援事業「実践力のある地域人材の輩出～大学連携キャリアセンターを核にして～」に取り組んでいる。この取り組みで開発された「キャリア教育効果測定システム」を、MC講座の効果測定の手法において参考とした。

「キャリア教育効果測定システム」では、「人間基礎力」の概念的な整理、及び効果測定に際して測定項目の抽出と定義づけを行っている。この指標をもとに、①育成された能力（学士力）の変化については教育プログラムの実施前後に測定、②受講生の活動への関わり方の変化については教育プログラムの実施中に測定（毎回の授業終了時に調査）、という方法を採用している（戦略的大学連携取組事務局：42－43）。

この方法をもとに、MC講座の効果測定にあたっては、「音楽コミュニケーション・リーダー」の能力の整理及び定義づけを行った。それとともに、受講の結果として育成された能力の変化を測るため、講座の開始前及び終了後に調査を実施することとし、調査シートの作成を行った。

2) コンピテンシー・ディクショナリーの検討

コンピテンシーとは、「卓越した業績を峻別する人材の能力」を指す語と定義される（梅津・成田・横山訳：iii）。卓越した業績を生む人材の行動分析により、その能力を表すコンピテンシー・モデルを構築し、企業の人材マネジメントに活用するための理論である。

MC講座は、受講生のコミュニケーション力の向上に役立てることを柱のひとつとしているが、その能力を定義づける要素の抽出には、コミュニケーションやチームワークのコンピテンシーが参考になる。コミュニケーションのコンピテンシーの概要として、例えば「様々な意見を誠実に受け止める」「円滑に相手を説得する」「社外で効果的な折衝をする」が挙げられている（佐藤純：21）。一方チームワークのコンピテンシーの概要は「仕事のバトンタッチゾーンの重視」「共通の目標の設定」「自分の役割の明確化」「異なる意見のまとめ」「禁止事項」が挙げられている（佐藤純：33）。これらのコンピテンシーから、MC講座の内容に即して、求められる能力の検討を行った。

4. 効果測定調査シート（案）の作成

前節に述べたように、効果測定の手法及び内容の検討を経て、MC講座における効果測定調査シート（案）の作成を行った。指標の設定及び設問の絞り込みの過程は以下の通りである。

はじめに、本プロジェクトの柱である「専門力」「社会性」「コミュニケーション力」のもと、それらを構成する要素を前提として、細項目を抽出した。

例えば、本プロジェクトにおいて「専門力」は演奏実技、マネジメント・プロデュース能力を構成要素としている。演奏実技の細項目としては、演奏実技の向上、作品へのアプローチ方法の理解、聴衆を意識したプログラミングの理解、作曲家・作品・楽器に関する知識、

及びこれらを総合して演奏者としての心構え（あるいは演奏に対する姿勢）が挙げられる。

他の柱・構成要素に対応する細項目については表1に示すので参照されたい。

設問の設定にあたっては、表1を指標として、求められる能力について回答者の自覚を促すこと、講座は1年間の履修を基本としていることから、1年間の学生の成長の度合いを測定することが可能な設問事項とすることを前提とした。

5. 検討の結果

以上の検討の結果、MC講座の効果測定にあたっては、講座開始前と終了後に調査シートによるアンケート調査を実施し、その変化を見ることによって受講生の能力の伸びを測定することとした。調査シートの設問は回答に時間がかかりすぎないように、A4用紙1枚に20項目程度とした。程度を測定する設問は、3を基準とする5段階による測定とした。

一方、受講生の自由な発想や考えが表れるよう、自由記述の設問を含めた。

講座開始前及び終了後の調査シート（案）は表2及び表3を参照されたい。

講座開始前の調査シート（表2）では、受講前の学生の状態を把握する。まず、受講したきっかけを尋ねることによって、MC講座に対し学生にどのような潜在的ニーズがあるかを調査する。次に、幅広く音楽活動を行う意欲や、将来の展望を具体的に職業として描いているかどうかを問う。その上で、「専門力」「社会性」「コミュニケーション力」をもとに設問を展開している。

講座終了後の調査シート（表3）では、講座開始前の調査シートに対応した設問により、受講生の変化を測定する。最初の設問では、MC講座が学生の興味と関心をどの程度喚起したかを尋ねる。次に、「専門力」「社会性」「コミュニケーション力」に関し、講座開始前の調査シートと対になる設問によっ

表1 効果測定調査シートの指標

プロジェクトの柱	構成要素	細項目
専門力	演奏実技	演奏実技の向上 作品へのアプローチ方法の理解 聴衆を意識したプログラミングの理解 作曲家、作品、楽器に関する知識 演奏者としての心構え
	マネジメント・プロデュース能力	音楽活動の展開への意欲 文化施設等の運営の仕組みの理解 演奏会を制作するプロセスの理解 演奏会に携わる関係者の理解
社会性	音楽のキャリア	将来の職業についての意識向上 専攻以外の分野への興味・関心 目標とする音楽家の姿 音楽に関連する職業の理解
	音楽の持つ社会性の認識	社会の動向への興味・関心 音楽と地域社会の関係の理解
コミュニケーション力	人の話を理解する 自分の言葉で語る	様々な意見を聞き、理解する 積極的に意見を述べる 意見をわかりやすく伝える 他大学の学生との交流 情報交換、情報共有

注) 佐藤・早川作成

て、その能力の向上や達成度を比較可能にしている。さらに、MC講座を受講したことにより、幅広く音楽活動を行う意欲が高まったかどうか、具体的な活動内容や将来の展望を持つことができるようになったかどうかを問う。すなわち、学生の柔軟で創造的な思考の伸びや、意欲の向上の度合いを測定する。

6. 今後の検討課題

MC講座効果測定のための今後の検討課題として、次の点が挙げられる。

第一に、測定結果の集計方法である。受講生の全体的な傾向をグラフによって表すほか、記名形式の場合には個人の変化を分析し、より細分化した属性と対応させることが可能であろう。

第二に、MC講座開始前及び終了後の調査シートに加えて、講座においては3大学合同の合宿による実践的な夏期セミナーを予定しており、夏期セミナー受講生の振り返りシートと教員による評価シートの作成を検討している。ワークショップを含む3日間の夏期セミナーでは、通常の講義とは異なり、受講生がグループ活動やディスカッションに積極的・主体的に取り組むことが望まれる。そのため、チームワークやリーダーシップに関する設問を取り入れた受講生の振り返りシートを作成する。

また、教員による評価シートでは、夏期セミナーの全般的な評価と、受講生個人の取り組みを評価する方法を検討している。受講生個人の評価においては、教員が指標に基づき数値による評価を行う成績表の作成を今後の課題としている。

7. 所感 ―「音楽コミュニケーション・リーダー」の能力をめぐって

調査シートの設問の検討段階においては、MC講座が目標とする「音楽コミュニケーション・リーダー」の養成において、求められる能力の定義づけが最も大きな課題であった。すなわち、音楽家が自らの専門分野の「外」に目を向け、幅広く活躍する人材となるためには、音楽を介したコミュニケーションに対する意欲や積極的な姿勢、及び柔軟かつ創造的な思考が求められる。しかし、これらをいかに測定可能な指標として取り上げ、設問に絞り込むかという段階で、直接に相当する先行研究が見つからないことと相まって独自の検討を行う必要があった。

したがって今回の検討は、「音楽コミュニケーション・リーダー」に求められる能力を具体化・明確化する新しい試みであったといえることができる。MC講座の効果測定にあたっては、音楽家としての専門的な能力を活かし、音楽の持つ力を地域社会をはじめとする様々な場面で伝えていくには何を学ぶことが必要か、そしてそのために求められる音楽教育のあり方にまで必然的に掘り下げることとなり、今後も検討を続けることによってその意義を深めることができるであろう。

(佐藤良子、表作成：早川まこと)

表2 ミュージック・コミュニケーション講座
講座前調査 (案)

講座に関する以下の質問にお答えください。
[5:とてもそう思う 4:そう思う 3:どちらでもない 2:あまりそう思わない 1:全くそう思わない]

ミュージック・コミュニケーション講座を履修しようと思ったきっかけを教えてください。
1. コミュニケーション能力を高めたいと思ったから。 2. 将来の仕事に役立ちそうだから。 3. 音楽に関して幅広く知識を得たいから。 4. その他

自分の専攻分野を活かして音楽活動(演奏活動や企画・制作など)を幅広く積極的に行いたいと思いますか。 5 4 3 2 1

例えばどのようなことに取り組みたいですか。
(具体的に)
将来はどのような職業に就きたいですか。

演奏実技を活かし、多くの人に音楽を伝えるためにどのようなことを学びたいですか。

音楽を理解することを助けるアプローチ方法(作曲家、作品、楽器など)について学びたい。 5 4 3 2 1

鍵盤手とプログラミング(楽曲、曲目の構成)についての考え方を学びたい。 5 4 3 2 1

演奏者としての心構えを学びたい。 5 4 3 2 1

その他

音楽活動を盛り立て
演奏会を制作する
音楽活動に携わる
その他

2 1
2 1

将来、自分が活躍していくために必要な音楽に関する職業や社会の動きについて、どのようなことを知りたいですか。

音楽に関連する職業について、どのようなものがあるのか知りたい。 5 4 3 2 1

自分の専攻以外の楽器や学科について知りたい。 5 4 3 2 1

音楽が地域社会に果たす役割を知りたい。 5 4 3 2 1

社会情勢と音楽活動の関わりについて知りたい。 5 4 3 2 1

その他

人と人をつなげるコミュニケーション力を高めるために、どのようなことに取り組みたいですか。

周りの人と協働して仕事に取り組みたい。 5 4 3 2 1

自分の意見をわかりやすく述べるように努めたい。 5 4 3 2 1

他大学の学生や教職員と積極的に交流したい。 5 4 3 2 1

人の話をよく聞き、話の意図や内容をきちんと理解できるように努めたい。 5 4 3 2 1

その他

表3 ミュージック・コミュニケーション講座
講座後調査 (案)

講座に関する以下の質問にお答えください。
[5:とてもそう思う 4:そう思う 3:どちらでもない 2:あまりそう思わない 1:全くそう思わない]

ミュージック・コミュニケーション講座の内容に興味は持てましたか。 5 4 3 2 1

演奏実技を活かし、多くの人に音楽を伝えることに役立てるため、どのようなことを学びましたか。

音楽を理解することを助けるアプローチ方法(作曲家、作品、楽器など)について学んだ。 5 4 3 2 1

鍵盤手とプログラミング(楽曲、曲目の構成)についての考え方を学んだ。 5 4 3 2 1

演奏者としての心構えを学んだ。 5 4 3 2 1

その他

音楽活動を盛り立てさせているマネジメントやプロデュースについて、理解は深まりましたか。

演奏会を制作するプロセスについて理解が深まった。 5 4 3 2 1

演奏会に携わる関係者とその役割について理解が深まった。 5 4 3 2 1

その他

将来、自分が活躍していくために必要な音楽に関する職業や社会の動きについて、どのようなことを知ることができましたか。

音楽に関連する職業に 2 1

自分の専攻以外の楽器 2 1

音楽が地域社会に果た 2 1

社会情勢と音楽活動の関 2 1

その他

人と人をつなげるコミュニケーション力を高めるために、どのようなことに取り組みましたか。

周りの人と協働して仕事に取り組みんだ。 5 4 3 2 1

自分の意見をわかりやすく述べるように努めた。 5 4 3 2 1

他大学の学生や教職員と積極的に交流した。 5 4 3 2 1

人の話をよく聞き、話の意図や内容をきちんと理解するように努めた。 5 4 3 2 1

その他

講座を受講したことにより、自分の専攻分野を活かして、今後一層幅広く積極的に活動したいと思うようになりましたか。 5 4 3 2 1

例えば、今後どのようなことに取り組みたいですか。

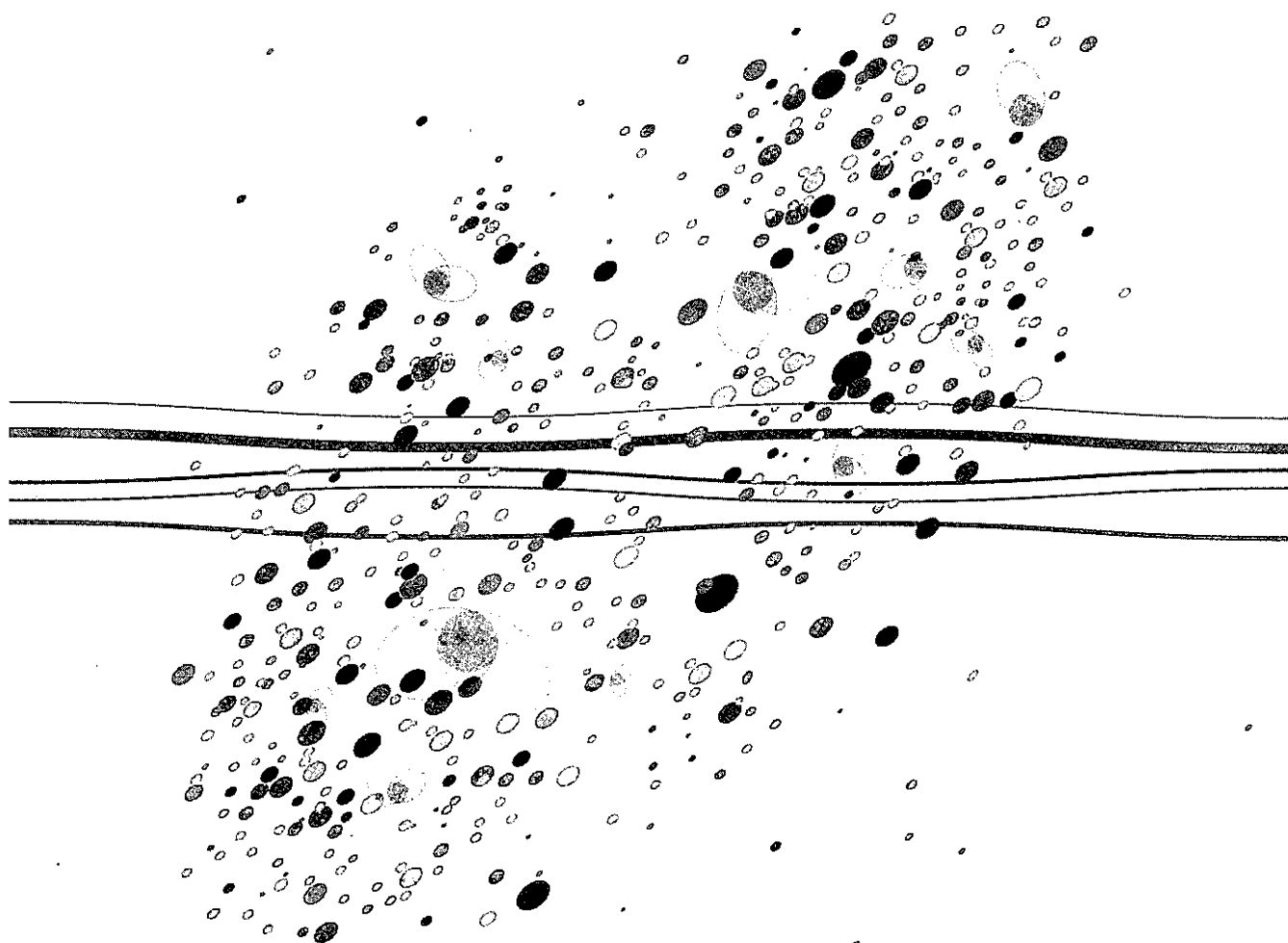
将来はどのような職業に就きたいですか。

インターネットビデオ会議システムによる講座の展開(配信・同時受講)は十分に活用できましたか。 5 4 3 2 1

講座全般に関し、良かった点や改善すべき点があれば書いて下さい。

4. トライアル講座報告書

3大学共通科目新設に向けて：平成21年度に実施したトライアル講座（全3回）の報告



仲道郁代のコンサートの作り方

2009年11月11日(水) 18:30~20:00 神戸女学院大学 オルチン館 合奏室

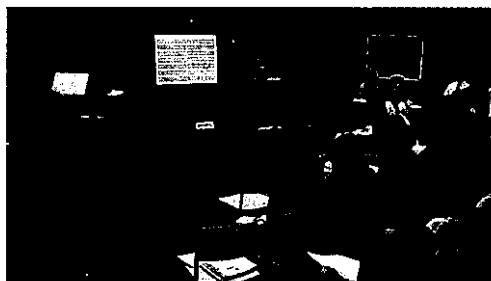
3大学連携の第1回トライアル講座として11月11日(水)ピアニストの仲道郁代さんを神戸女学院大学にお招きして、講演「仲道郁代のコンサートの作り方」を行いました。

インターネット・ビデオ会議システムで結ばれた3大学の学生に「コンサートって何のためにするものだと思いますか?」と質問を投げ掛けるところからスタートして、ご自分の活動の基本精神と具体的な考え方について実例を挙げながら話して下さいました。

ベートーヴェンの「悲愴」ソナタの解釈から実演の可能性を探索し、また、月の裏側に住む馬たちの気持ちに想いを馳せるなど、イメージの広がりを実感するワークショップなどを行いました。



笑顔で話す仲道郁代さん



楽曲分析の重要性を実演を交えながら
わかりやすくレクチャー

学生のこぼれ

◇「その場で演奏するだけがコンサートじゃない、その過程も含めて＜コンサートをする＞ということだ」という話が一番印象に残っています。(ピアノ・2年生)

◇「演奏家は演奏だけをしていれば良い」という考えはナンセンスであると強く感じました。(ピアノ・4年生)

◇「常に考えること」と仲道さんがおっしゃっていましたが、考える程にたくさんのアイデアが生まれ、演奏も味付けされていくことがとても面白いと感じました。(ピアノ・院1年生)

◇「精神性」についてのお話の中で、その演奏会を人に感動してもらえるものにするには自分がその音楽の中に入りこまなければならないというお話が印象に残りました。(ピアノ・2年生)

◇人前で話したり表現したりする限り、エンターテイナーでなければならないし、アウトプットの何十、何百倍ものインプットがないとだめだと実感しました。(声楽・院1年生)

◇他の大学の人たちが大きく画面に映っているのを見ることができたり、音楽に対する考え方が聞けたりして、本当に同じ場で講義を受けているような感じがしました。(ピアノ・2年生)

◇女学院からの配信でしたが、意見交換などを通して他大学の人たちもリアルタイムに学んでいる雰囲気に関心を持ってました。(ピアノ・1年生)

◇照明やピアノの音にとってもこだわるということを聞いて、私は照明のことなど何も知らないもので、勉強した方がいいのかなと思いました。(声楽・2年生)

◇「トーク内容はあまり考えすぎずに舞台に出る!話したいことは練習の段階で頭の中にあるわけだから」というお話に納得しました。今後はトークにもトライしていきたいです。(ピアノ・院2年生)

◇考える訓練、言葉を使う訓練の重要性。意見を求められた時、「わかりません」「恥ずかしい」ではなく、どんどん意見を発言したり質問したりする能力を高めていきたいと思いました。(ピアノ・院1年生)



学生たちからの質疑に答える仲道さん

※神戸女学院大学の会場に参加した学生の意見を掲載しています

地域とともに育つアーティスト～若手音楽家の活躍～

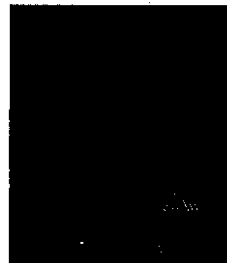
2009年12月2日(水)18:30～20:00 昭和音楽大学 南校舎 C511 階段教室

3大学連携による第2回目の合同トライアル講座は昭和音楽大学で12月2日(水)に行なわれました。講師には(財)地域創造及び(財)アフィニス文化財団ディレクターの小澤櫻作さん、若手ヴァイオリニストの松本蘭さんのお二人を迎え、「地域とともに育つアーティスト～若手音楽家の活躍～」をテーマにお話いただきました。

まず始めに小澤さんが「アウトリーチ活動の背景」として日本における公共ホールの増加と現状についてお話下さり、続いて松本さんとともにDVDを視聴しながら(財)地域創造の「公共ホール音楽活性化事業(通称:おんかつ)」の取り組みについて説明がありました。そして「おんかつ」に参加しアウトリーチ活動を行った経緯を松本さんから紹介し、その後の対談ではアウトリーチ活動の普及と発展及び意義についてお二人の実体験に基づいたお話がありました。最後の質疑応答では、近年の財政難の中で公共ホールに求められるあり方や、松本さんのアウトリーチ活動の具体的な内容について、インターネット・ビデオ会議システムを通じて結ばれた3大学の学生からの質問にお答えいただき、今回も大変有意義な講座となりました。



小澤さん



松本さん

学生のコメント

- 人と人との関わり(繋がり)の大切さ、素晴らしさを感じました。(アートマネジメント1年)
- アウトリーチの実体験が聞けてためになりました。「子ども達の人生を変えてしまう」という言葉が印象に残りました。(ピアノ3年)
- アウトリーチが始まったきっかけから、その活動が成す意味までを考えさせられる講座でした。「地域」+「アーティスト」のつながりを大切にすることで、お互いが成長できる良い活動であると改めて思いました。(アートマネジメント1年)
- 「聴き手に媚びずに」という言葉など、色々な事に気付けて良かったです。今後の演奏活動に活かしたいと思います。(ピアノ3年)
- ただ演奏家として演奏会を開くだけでなく、未来ある子どもたちの前で演奏活動をしてクラシック音楽に触れてほしいと私も考えていたので、実際の映像を見て雰囲気などが分かって良かったです。(器楽1年)
- 舞台スタッフの仕事にも共通することが多かったので、今日の事を意識して舞台を作りたいです。(舞台スタッフ1年)
- 曲の構成やトークの仕方、交流の方法などがとても勉強になりました。子どもたちからも得られるものがあるという話を聞き、また実際にアウトリーチに参加した子どもたちの笑顔を見て、もっと活動に参加したいと思いました。(器楽1年)
- 他の場所と一緒に講義を受けられるのが、とても新鮮でした。もっと他の学校の学生の皆さんと気軽に交流がしてみたいです。(器楽1年)
- これからのアウトリーチ活動の方向性を考えさせられる内容をありがとうございました。今後、私たちがこの活動を担っていくと思うので、とても参考になりました。(アートマネジメント1年)
- これからのクラシック音楽界のために、とても重要で、必要とされてくる活動だと思い、興味が深まりました。これからの自分の音楽活動に活かしていきたいと思いました。(器楽1年)

※昭和音楽大学の学生のコメントを掲載しています。



楽しい音楽会にするための3つのヒント

2010年1月13日(水)18:30~20:00 東京音楽大学 A館地下100

3大学連携による第3回合同トライアル講座として、1月13日(水)東京音楽大学において、東京音楽大学教授 大谷康子先生を講師にお招きし、講演「楽しい音楽会にするための3つのヒント」を行いました。

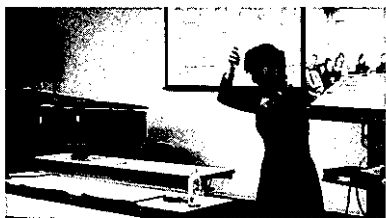
講座は大谷先生のヴァイオリンによる「愛の挨拶」の演奏にはじまり、病院コンサートでの患者さんとの触れ合いや、東京交響楽団での活動に基づく体験談などをお聞かせ頂きました。後半では「楽しい音楽会にするためにはどうしたらよいか」というテーマで3大学の学生に質問を投げかけ、音楽の本質に迫る大変内容の濃い講義でした。講座の最後には大谷先生が、歩きながら「チャルダッシュ」を演奏して下さり、今回の講座の内容を身を持って体験することができました。講座終了後もインターネット・ビデオ会議システムを使用して、3大学の学生が自発的な意見交換や交流を行い、大谷先生も交えての貴重な意見交換の場となりました。



大谷康子先生

学生のコメント

- 音楽に形はないが人の心に入ったとき何かを伝えることができる、そのメッセージが心に響きました。(ヴァイオリン/1年)
- 本質を知らなければ本物の演奏が出来ないというお話がとても印象的でした。デジタル化している世の中で“生(なま)”に触れるという事がなくなっていますが、肌で感じて体験することの大切さを学ぶことが出来ました。(ピアノ/3年)
- 先生が「音を届ける」という表現をされていたことが心に残っている。演奏する、とか、披露する、という意識で演奏に臨むのではなく、聴衆のことを第一に考えておられる姿勢が大切なのだと思った。(ピアノ/2年)
- 今まで勉強になると思い聴講していたが、聴講が楽しいと思ったのは今回がはじめてだった。この雰囲気そのものが、今回のテーマなのかなと思った。(声楽/1年)
- 演奏者である大谷先生ご自身が、病院や学校へ行行って聴かせる事をすごく楽しんでいるのが一番印象に残りました。だからこそ、行った先のお客さんを見て、感動(うれしい、かわいそう)されている。演奏者は聴き手側の気持ちにシンクロするくらいの気持ちを持つ事も一つの手だなと思いました。(ピアノ/2年)
- 私自身は教員を目指しているが、子どもたちの前に立って指導する立場になったとしても初心を忘れず、子どもの気持ちになって、音楽の楽しさを伝えたいです。それには私自身が、一番音楽を奏でることを楽しむ、エンターテイナーでなければならないと思いました。(ピアノ/2年)
- 聴く人がどういう音楽を求めているのか、自分がそれに答えられるか。変化のある人の心に、興味を持ってもらえるようなプログラム作り。この講義を聴いて、改めて音楽の素晴らしさを感じて、先生の言葉で心を動かされることがたくさんあった。言葉で伝える力、音楽で伝える力は、人柄によるもの大きいということを感じた。(ヴァイオリン/1年)



- 私は音大に入ってから、音楽を勉強としかとらえられなくなってしまいました。でも昔「この曲が弾きたい!」「あの曲すごく好き」という思いがたくさんあったのです。実技試験や先生へのプレッシャーで楽しむ余裕が無いのですが、もう一度大好きな音楽をさがしてみようと思います。(ピアノ/2年)

※東京音楽大学の学生のコメントを掲載しています。

おわりに

音楽系大学はこれまで高い専門性を特徴とし、専門領域と研究分野が細分化される状況が続いてきましたが、このたび、社会で活躍できる応用力と人間力を有する人材の養成をめざして、3大学が連携して新たな総合的・実践的研究の一步を踏み出しました。

平成21年度は、3大学連携の協定締結（9月）からわずか半年の事業期間でしたが、アメリカにおける先進的事例の調査と3大学共通科目「ミュージック・コミュニケーション講座」新設のための準備（トライアル講座のインターネット・ビデオ配信、および学習効果の測定法研究）に取り組みました。本文に報告されているとおり、まずは共同研究の第一段階を順調に進めることができました。平成22年度は、いよいよ音楽コミュニケーション・リーダー養成のための実践に移り、3大学共通科目をカリキュラムに組み入れて実施するほか、3大学の共同により子どものためのコンサートを開催します。

アメリカにおける研修報告にも表れているとおり、この連携事業は、単に3大学における授業の改善に留まるものではなく、キャリア支援・地域連携等の要素と深く関わりながら、「音楽がどこに向かっていくのか」という根本的な問題と正面から向き合うものでもあります。この問いに対して具体的な答えを提示することができるように、来年度以降さらに研究活動の幅を広め、考察を深めていく予定です。

取組代表校 東京音楽大学 教授
武石みどり

東京音楽大学 連携センター

〒171-8540 東京都豊島区南池袋3-4-5

Tel : 03-3982-3513 Fax : 03-3982-3227 tokyo-ondai@music-communication.com

神戸女学院大学音楽学部 連携ルーム

〒662-8505 兵庫県西宮市岡田山4-1

Tel : 0798-51-8588 Fax : 0798-51-8588 kobe-c@music-communication.com

昭和音楽大学 連携ルーム

〒215-8558 神奈川県川崎市麻生区上麻生1-11-1

Tel : 044-953-9867 Fax : 044-953-1311 showa@music-communication.com